
手には凶器、目には狂気

洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手には凶器、目には狂気

【Nコード】

N9629G

【作者名】

洋

【あらすじ】

6年前、謎の言葉を残して姿を消した姉。彼女を探して欲しいと、妹の深雪が毛利探偵事務所を訪ねてきた。さっそく調査に乗り出したコナンたちだったが、当時の姉の同級生たちを巻き込んだ殺人事件が次々と発生する。そして事件の裏に浮かび上がる姉の影……。本当に姉が犯人なのだろうか？そして深雪は姉と再会することが出来るのだろうか？コナンが暴く真犯人とは一体・・・？単発の事件モノです。2010年1月29日より、8ヵ月ぶりに連載再開しました。

プロローグ

——では、次のニュースです。

本日午後3時頃、東京都〇〇区の××アパートの一室で、男性の刺殺体が発見されました。

殺害されたのはこの部屋に住む無職・せつたともや 摂田智也さん（25）で、数日間連絡が取れないことを不審に思った友人が摂田さんの部屋を訪れたところ、仰向けに倒れて死亡している摂田さんを見つけたということです。

死因は部屋にあった果物ナイフで胸部を刺されたことによる失血死で、死後2、3日が経過しているものと見られています。

なお、遺体発見当時、玄関の鍵は開いており、部屋には荒らされた様子なども見当たらないということです。

警視庁は顔見知りによる犯行の線を視野に入れて捜査を進めるとのことです——

深雪^{みゆき}はふと、何かの物音で目が覚めた。

しばらくぼううつとしてしていると、次第に真冬の夜中の冷たい空気が体を包んでいった。

意識がはっきりしてきて、耳が再びかすかな物音を捉^{とら}える。

ベッドに入ったまま音のほうに目を向けると、姉の部屋に通じるドアから小さな明かりが漏れていた。

言いしれぬ不安が一拳に押し寄せる。

訳のわからない胸騒ぎを、直感的に感じた。

深雪はベッドから抜け出し、寒さにも構わずそのままドアを開けた。

頼りない電気スタンドの明かりの中で動き回っていた姉が、驚いた表情で振り返る。

彼女の手には、出掛けるときいつも持ち歩いている黒いバッグがあった。

深雪の胸騒ぎが不安に変わった。

「ごめんね、深雪。起こしちゃった？」

姉が、慌てて笑顔を作って言う。

「お姉ちゃん、どこか行っちゃうの？」

姉に駆け寄り、その腕にしがみついて、泣きそうになりながら詰め寄った。

しばらく迷ったような顔をしていたが、姉は腰を落として深雪に向かい合うと、優しく頭を撫でてくれた。

「お姉ちゃんはね、遠いところに行くの」

「遠いところ・・・？おばあちゃんの家？」

「ううん。もっと、もっと遠いところ」

「そんなのやだ！深雪も一緒に行く！」

そう言う姉は、ひどく悲しそうな顔になった。

「ううん、だめ。深雪はお留守番。お姉ちゃんは、大丈夫だから。ね？」

「やだ！やだやだ！」

必死で姉を引き止めているうちに、涙が溢れ出てきた。

姉が遠くへ行ってしまう。訳のわからない不安に、恐怖さえ感じた。

「お願いだから、深雪を置いていかないで。どこへも行かないで！」

姉はしばらく、そう繰り返して泣きじゃくる深雪を静かに宥^{なだ}めてくれていた。

「お姉ちゃんがいなくなったら、深雪はどうしたらいいの？」

「大丈夫。大丈夫だから。だから、もう寝なさい。早くベッドに戻らないと風邪引いちゃうわよ」

ベッドに戻るよう促す姉に、いやいやと首を振り続ける。
姉はずっと困った顔をしていた。

やがて寒さを感じ始め、あらかた涙も出尽くした頃、姉に必死に宥めすかされた深雪は渋々布団へ戻る気になって、ようやく重い足を動かした。

だが、肩を抱かれて自分の部屋へ戻り、ほんのりと温かいベッドに潜り込んで姉を見上げたら、別の感情が湧いてまた涙が出た。

手を握り、頭を撫でてくれるいつもの優しい姉の顔だったが、悲しみの色がはつきりとその瞳に映っている。

それを目の当たりにして、深雪は何も言えなくなった。

姉の中にある、引き止めてはいけない何かを漠然と感じ取ったのだ。姉がいなくなる。不安と恐怖は確信へと変わっていた。それをわかっていながら何も出来ないことが無性に悲しい。

瞳から大粒の涙を流しながら、深雪は姉を見つめることしか出来なかった。

一体どのくらいの時間が経ったのだろうか。

泣き疲れ、眠気で視界が霞む中、繋いでいた姉の手の温もりが離れていくのを感じた。

自分に背を向けて去っていく愛しい姉の後ろ姿をうつすらと視界に捉えたのを最後に、深雪は吸い込まれるように深い眠りに落ちて行った。

この夜の出来事が、数年後に起こる悲しい事件の幕開けとなることなど、このとき誰が予想しただろうか――。

「・・・で、あなたはその失踪したお姉さんを捜してほしい、と」

ソファの肘掛けに気だるそうに頬杖をつきながら、小五郎が言った。
向かいの椅子に座るセーラー服の少女が、背筋を伸ばしたまま答える。

「はい」

彼女の名は安達深雪^{あだち みゆき}。都内の高校の1年生で、16歳。

まだ幼さの残る顔をしっかりと引き締めて、先ほどこの毛利探偵事務所の戸を叩いたのである。

「姉はその夜、出て行ったきり行方不明になりました。父と母がすぐ搜索願を提出しましたが、見つかることなく今月でもう6年も経ちます」

深雪の語気が強くなる。

「もう警察には任せておけないと思って、だから数々の難事件を解決している名探偵の毛利さんに、どうしても姉の消息をつきとめて頂きたいんです。せめて、生きているのかどうかだけでも知りたいんです！」

小五郎はその言葉を聞き流しつつ、テーブルに置かれた1枚の写真を手に取り、しげしげと眺めた。

その写真を、小五郎の後ろに立っていたコナンと蘭も覗き込む。

写真の中から、優しそうな目元の女性が、満面の笑みでこちらを見

つめ返してきた。

なるほど、どこことなく深雪に似ている。

「それが、失踪する直前の姉の写真です。姉の名前は京香^{きょうか}、現在25歳で、失踪した当時は19歳の大学生。私は10歳でした」

真剣な眼差しの深雪をちらりと見やっってから、小五郎は面倒くさそうな声を出した。

「しかしですねえ・・・もう6年も警察が捜していて見つからない人なんて、さすがにこの名探偵毛利小五郎でも手に負えるかどうか・・・」

——まーた出たよ、おっちゃんの不機嫌。

コナンは内心で呆れて溜息をついた。

いつもなら『名探偵』のおだてに乗って大張り切りするところだが、今日の小五郎はひどく機嫌が悪い。

昨晚遅くに飲んだくれて帰ってきて、そのまま昼近くまで眠りこけてしまったため、早朝の沖野ヨーコの番組を観逃したのが原因である。

さらに自分の自業自得を棚に上げて、なんで起こしてくれなかったんだ、とか、気を利かせて録画しておいてくれないじゃないか、などと理不尽なことでコナンや蘭に八つ当たりをしたせいで蘭を怒らせ、メシ抜きの刑まで食らったものだから、小五郎の性格からして、今日は仕事の依頼など引き受ける気分になれないのだろう。

「ですから、今のところは警察に任せておいたほうが良いと思うんですがね」

「そんな……。毛利さんのような優秀な方なら、必ず解決して下さると信じて訪ねて来たのに……」

涙ぐむ深雪に、しかし小五郎はあからさまに迷惑そうな顔を向けた。

「解決ってねえ、お嬢さん。そりゃ確かに私は数々の難事件を解決してきましたよ。しかしお姉さんがあなたに残した言葉から察すると、この件は事件というよりただの家出のようすし、6年も前の家出人の搜索となるとこれまた面倒くさ……。っあだっ！」

やる気のない小五郎のうなじに、蘭の空手チョップがクリーンヒットした。

「おい！お前何すん……」

とっさに振り返った小五郎を、鬼のような形相で睨^{にら}む蘭と、軽蔑した眼差しを向けるコナン。

目の前には、目にいっぱい涙を溜めた深雪。

小五郎は咳払いすると、決まり悪そうにソファに座り直した。そして無理やり笑顔を作り、深雪をたしなめる。

「しかしですね、人捜しの依頼となると、結構な依頼料が必要なんですよ？あなたのような高校生には、大金だと思っうんですけどねえ」

「ちょっとお父さん！少しくらい負けてあげてもいいじゃない！」

「そうは言ってもお前なあ、こっちも商売なんだよ」

だが深雪は、そんな小五郎と蘭の会話など気にも留めない様子で、

脇のカバンを探り始めた。

「あ、お金なら用意してあります。こういう場合に備えて、中学生の頃から地道に貯金してきたんです」

そう言うと、深雪はテーブルに取り出した茶封筒を置き、無造作に小五郎のほうへ押しやった。

「学校から許可を貰って、中学1年から今までやってきたアルバイトで貯めました。それ以前からあった貯金も合わせて、全部で40万円あります」

「よっ・・・40万!？」

小五郎、コナン、蘭が声を揃えて飛び退く。

目の前に置かれている40万もの大金を、この華奢きゃしゃな少女が一人で貯めてきたなど、とうてい信じられなかったのだ。

札束に目がない小五郎でさえ、この重すぎる茶封筒に手を触れられないようだった。

しかし深雪は、その金には何の未練も無いようで、それ以上封筒には目もくれず、ぽっと目を見開くと小五郎に宣言した。

「もしこれで足りないようでしたら、これからまたバイトで稼いで必ずお支払いします。何年かかっても、必ず。ですからお願いです、どうか姉を捜して下さい!」

勢い良く頭を下げた深雪の、しなやかなポニーテールが揺れる。姉への半端ではなく強い思いを目の当たりにして、小五郎はタジタジになってしまった。

「わ、わかりました、出来る限り捜査をしてみます。しかし6年も経っているので、ええと、何から手を付けて良いのやらさっぱり・。何か、現在のお姉さんに繋がる有力な手掛かりとかは御存知ありませんかね？」

「例えばさ、当時のお姉さんが行きそうな場所とか、失踪する前に何か変わったことが無かったか、とか」

いつもの子供声で、コナンが付け足す。

深雪は視線をコナンに向けると、考えるような表情になった。

「うーん……。今ボウヤが言ったことに特に心当たりは無いんだけど、他になら……」

「他に、何か手掛りがあるんスか？」

小五郎が身を乗り出す。

「あ、はい。手掛りというよりは、搜索の手段に近いんですけど、姉は失踪した当時とても熱心に大学のサークルで活動をしてまして、今度そのメンバーで同窓会が開かれることになったんです」

そこまで言うと、深雪は先ほど札束を出した鞆から、今度は一枚のハガキを取り出した。いち早くコナンが覗き込むと、書面には同窓会の日時や場所等の詳しい案内が確認できた。

「私もよく姉にくっついてサークルの活動を見に行っていましたから、当時の姉の同級生とは顔見知りで、今回こうして同窓会に誘って頂

いたんです。聞き込みも兼ねて、毛利さんに一緒に参加して頂けないかと思って。当時の同級生に話を聞けば、姉に繋がる何かが得られるんじゃないかと思うんです」

「ほーお。サークル仲間ですか。言わば当時のお姉さんと最も仲が良かった人たちですな」

小五郎のその言葉に、深雪の表情が少しだけ和らいだ。

「はい。皆さんとても良い人たちで、姉もすごく信頼していました。ですから今回の姉捜しに、協力して頂けると思うんです」

「参加すれば、まとめて聞き込みが出来そうですね。では捜査の第一歩として、まずこの同窓会に行ってみますか！」

小五郎がハガキから顔を上げてそう言うのと、深雪は顔を綻ほころばせた。

「ありがとうございます！」

蘭と深雪が親しげに言葉を交わす横で、コナンは同窓会の案内のハガキを見つめながら、深い考えに沈んでいた。

——お姉さんが深雪さんに残した『遠くに行く』というのは、一体どういう意味なんだ？ただ『家出する』という意味ならわからなくもないが、夜中にこっそり家を出て行こうとしている人間が、家族に『家出する』なんて意味の言葉をかけるか？普通。俺ならその場をどうにか誤魔化ごまかすけどな。

コナンは事件現場で、毎回のように「ちょっとトイレ」と言って蘭を誤魔化し、こっそり小五郎を眠らせに行く自分を思い出していた。突然の失踪。

そして最後に妹に残した、不可解な言葉。

コナンは直感的に、事件のときに感じるあの特有の雰囲気を感じ取っていた。

だがその思考は、蘭の明るい声によって遮られる。かきと

「大丈夫ですって、深雪さん。お姉さん、きっとすぐ見つかりますよ！どこかで元気に暮らしてて、何か訳があつてずっと連絡できないだけかもしれないし。私の知り合いにも、どこほつつき歩いてるんだかわかんないヤツがいますけど、たまに電話来るとピンピンしてますから」

その言葉が心に深く刺さるコナン。

そんな彼の気持ちなどつゆ知らず、小五郎が鼻を鳴らした。

「フンッ。あいつこそ、どっかの女のトコで元気に暮らしてるんじゃないのかあ？」

「そんなわけないでしょ！新一は厄介な事件に首突っ込んでるから帰って来れないだけよ！」

——はははー。ある意味ではおっちゃんの言ったことも当たってるけどなー……。

コナンは苦笑いして目をそらした。
蘭のところで元気にやっているのだから、小五郎の指摘もあながち間違っていない。

そのとき、毛利探偵事務所では日常茶飯事の言い合いをする父娘を眺めていた深雪が、クスリと小さく笑った。

毛利探偵事務所を訪ねて来てからずっと張り詰めた表情をしていた深雪が、初めて見せた穏やかな笑顔だった。

その笑顔を見て、コナンの心に複雑な感情の波紋が広がる。

彼も、失踪した新一^{じぶん}を待っている蘭のどことなく悲しそうな姿を日常的に目にしているためか、深雪のつらい気持ちは痛いほど伝わってくるのだ。

40万もの大金をたった一人で貯め、この6年間ひたすら悲しみに耐えてきた、そんな彼女が束の間に見せた笑顔に、コナンはいつも無理をして笑う蘭を重ね合わせた。

——何とか見つけてやりてえな、お姉さん。でも家出だとしても6年も行方不明なら、何か事件に巻き込まれてる可能性もあるし・・・
・せめて確かな生死の情報ぐれえは・・・。

そんなことを思いながら深雪を見ると、彼女がコナンの視線に気づき、にっこりと笑いかけてきた。

そしていたずらっぽい小声でコナンに尋ねる。

「ねえ、ボク。蘭さんの言ってる『新一』さんって、どんな人なの？ 蘭さんの彼氏？」

「ち、ちがうよ！ 蘭姉ちゃんの幼馴染の高校生探偵で、難しい事件を抱えてるからしばらく帰って来られないんだって」

何故か赤くなったコナンを不思議そうに見つめながら、深雪が頷いた。

「ふうん。難しい事件を抱えてるんだ・・・あ！」

突然発せられた深雪の素っ頓狂な声に、この期に及んでまだ言い合いを続けていた蘭と小五郎も驚いて振り返った。

「ど、どうかしたんスか？」

小五郎も負けず劣らずの素っ頓狂な声で訪ねると、深雪は興奮して話し始めた。

「今、事件って聞いて思い出したんですけど、あの、何週間か前に若い男性が刺されて殺された事件ってありましたよね！？確か、アパートで亡くなってるのを発見された、とか」

「ああ、その事件ならついこの間、知り合いの警部殿に詳しく話を聞いたので覚えてますよ。えーっと確か被害者は、25歳かそこらの無職の男性じゃありませんでしたっけ？」

「そうです、その事件です！」

その事件ならコナンも覚えている。

数日前に目暮警部が、小五郎の推理力を頼って相談に来たのだ。何でも、現場に残されていた手掛かりが少なすぎて捜査に行き詰まったらしい。

結局のところ小五郎が一向に『眠らない』ため、警部は諦めて帰ってしまったのだが。

「その事件が、何かお姉さんに関係あるんスか？」

困惑を隠せない顔で、小五郎が尋ねる。

深雪は控えめに言葉を選んで答えた。

「はい。えっと、ただの偶然だと思うんですけど、その殺された男の人も今回の同窓会に参加することになってた人で、当時の姉のサークルの同級生なんです」

「な、なんですって!？」

「——なんだって!？」

驚愕する一同に、深雪は慌てて付け加えた。

「でも姉が失踪したのは6年も前ですし、その人が殺されたことと姉の失踪は特に関係無いとは思うんです。ただ、何となく気になって……。警察の方は一応同級生全員を調べられたそうです」

「——確かに深雪さんの言う通り、2つの事件は6年も間が空いてるし、全く関係無いのかもしれないが……。もし2つの事件に何か関連性があるなら、お姉さんの失踪はただの家出じゃねーかもしれないな……」

早くも浮上した事件の予感に、コナンは鋭い視線で、テーブルに置かれたハガキを見つめた。

数日後。

小五郎はレンタカーを借り、蘭、コナン、深雪を乗せて雪の積もった山道を走っていた。

空には暗雲が立ち込め、今にも雪が降り出しそうな天気だった。

「お父さん、気をつけてね。ひよつとしたら凍結してるかもしれないし」

「わあってるよ。お前はちゃんと地図見とけ。道は合ってるんだろーな？」

助手席の蘭は広げた地図に顔をくつつけるようにして道を確認めた。

「大丈夫。あともう少しで別荘に着くはずよ」

———ほんとかよ。ただでさえ方向音痴な蘭に地図読ませたって信用できねーぜ……。しっかしえらく山奥だな。雪も降りそうだし・。もし吹雪にでもなったら足止め食らうぞ。

そう心の中で呟き、コナンは窓の外を通り過ぎていく木々を眺めた。

郊外の山の中腹にある別荘が、今回の同窓会の会場である。

コナンたちの分も来客が泊まれる部屋があるらしく、そこで一泊することになっている。

昼過ぎに別荘に集合し、夕食や語り合いをして一泊し楽しむというのが今回の趣旨らしかった。

「でもすごいすなあ。わざわざ別荘で同窓会だなんて」

ハンドルを握りながら、小五郎は半ば呆れたように後部座席の深雪に話し掛けた。

「サークルの顧問だった大学の先生個人の別荘らしいです。サークルの学生は自由に使えたので、しょっちゅう合宿とかしてたみたいですよ」

そう答えた深雪に、今度は隣に座っていたコナンが質問をする。

「すごいね、別荘持つてるなんて。その先生も参加するの？」

深雪はコナンのほうを向くと、残念そうに笑いかけた。

「ううん。ここ何年か体を悪くしてらっしゃって、来られないそうなの。小夜子先生こよしこっていうんだけど、私も昔何度か会ったことがあって、すごく良い人だから今回会えないのが残念・・・」

「そっかあー。そーなんだ」

「ところで、お姉さんの所属してたそのサークルってどんなことしてたサークルなの？」

地図から顔を上げた蘭が、深雪を振り返る。

「いろんなスポーツをするっていうサークルでした。週末ごとにテニスに行ったり、サイクリングに出掛けたり。大学内の体育館を借りてバスケやバレーなんかもしてましたね。私もしょっちゅう飛び

入り参加させてもらいました」

「へえー！楽しそう」

「スポーツ好きな人ばかりだったので、本当にいろんなことに挑戦してたイメージがありますねー。姉も運動神経が良かったし、他の皆さんもタフでした」

昔を懐かしみ、穏やかな表情を浮かべる深雪。

姉との思い出を語るときのその表情に自分を重ね合わせたのか、蘭は切なげに呟いた。

「・・・お姉さんが見つかって、また皆でスポーツできたらいいね」

蘭の思いを感じ取った深雪の表情にも影が差す。

「・・・はい。でももしこうやって毛利さんをお願いしても見つからないようなら、私・・・これからどうやって生活していけばいいんでしょう」

一同が口をつぐみ、車内が気まずい沈黙に包まれた。

タイヤがアスファルトの上を走る単調な音だけが響く。

しばらくのち、最初に口を開いたのはコナンだった。

「本当に大好きなんだね、お姉さんのこと・・・」

「うん・・・。姉がいなくなっても、またいつか会えるって思いがあったから6年間必死に耐えてこられたけど・・・もう見つからないってわかったら私、本当にひとりぼっち」

「でも、ご両親だっていらっしやるじゃありませんか。何もひとりぼっちだなんて・・・」

わざと明るい声で言った小五郎の励ましは、しかし深雪に遮られた。

「いいえ。両親は私たちのことなんて、いてもいなくても同じようにしか思っていないんです」

いきなり深雪の語気が強くなり、呆氣にとられる一同。
それを気にする風もなく、深雪は吐き捨てた。

「姉が失踪したときも、一応搜索願だけは出して、それで終わり。私がお金を貯めるためにバイトをするって言っても、止めもしないし励ましもしない。昔からそうでした。両親に嫌われているより、無関心のほうがよっぽど辛かった」

コナンは自分の横で、深雪が膝の上の拳をぎゅっと握り締めるのを見つめた。

「だから私は、小さい頃からずっと姉と二人で生きてきたんです。姉が私の親代わりでした。姉だけが心の支えでした」

——深雪さんは、思った以上に大きなものを抱えてる。ここまで必死にお姉さんを探してるのも、そういう家庭環境が根本にあるんだな・・・。

ふいに露出した、深雪の中にある複雑な感情に、再び重苦しい雰囲気訪れる。

蘭が何か別の会話を見つけようと、辺りをきよろきよろし始めた、その時だった。

「あ！お父さん、きつとここよ！」

山道のカーブを曲がりきると、突然視界が開けた。

「わあー！素敵・・・」

山の中腹、斜面に沿うように、その別荘は建っていた。

駐車場スペースの上に緩やかなカーブを描く階段が伸び、上りきると広々とした平らな地面に、ログハウス調の大きな建物がそびえている。

積もった雪の隙間から、レンガの煙突の突き出た鮮やかな赤い屋根が見え隠れし、傍らには一際目を引く大きなモミの木。

そしてバックは雪景色の森林といった、まるで西洋にいるのではないかと錯覚させられるような豪勢な景色に、一同は感嘆の声を上げた。

「ほんとすごいわねー。日本じゃないみたい」

「こんなところで一泊できるなんて楽しみだね」

駐車場に車を止め、トランクから荷物を降ろしながらはしゃぐ蘭とコナン。

その横で、いよいよ久しぶりに姉の同級生と会うとあってか、深雪は緊張した面持ちで立っている。

一方の小五郎はというと、最後の荷物をトランクから降ろし終える

と、不機嫌そうな顔で別荘を見上げて溜め息をついた。

「まったく金持ちは贅沢なもんだなあ。こんな立派な別荘持ってるなんてよお。俺は相変わらずレンタカー生活だつてのに・・・」

そうぼやき、ボタンツと大きな音をさせてトランクを閉めた。

すでに他の3人は、玄関へと続く階段を足取り軽く上り始めていた。

「おじさーん！早く早くー！」

コナンにせかされた小五郎がようやく階段を上りきって玄関ドアにたどり着くと、一歩前に進み出た深雪が大きく深呼吸して、インターホンに手を伸ばす。

――ピンポーン

寒々とした大気の中に、やたら高い電子音が響いた。

一瞬ののち、パタパタと微かな足音が聞こえてきたかと思うと、ガチャリと勢い良くドアが開いた。

「深雪ちゃん！待ってたわよ！」

「要さん！^{かなめ}お久しぶりです！」

ショートカットにメガネをかけた活発そうな女性が、満面の笑みで出迎えた。

「わぁ・・・吹き抜け」

「すっげえなあ」

要に案内されて玄関ホールに足を踏み入れた一同は、その豪華さに驚く。

いかつい玄関ドアを入ると、広々とした玄関ホールの奥に2階に続く階段があり、屋根まで吹き抜けになっていた。

正面には隣の部屋への両開きのドアがどっしりと構えている。

要は玄関横の靴箱から人数分のスリッパを取り出して並べ、一旦荷物を置くよう促した。

「とりあえずリビングにいらして下さい。もうほとんどみんな揃ってますから。えっと、そちらの3人は深雪ちゃんうかがの同伴の方々と窺うかがってますが・・・」

深雪の背後を覗き込むようにして言った要に、小五郎が軽く頭を下げる。

「はい。毛利小五郎といいます。こっちは娘の蘭。こいつはうちで預かってるコナンです。我々のぶんも部屋があるということで、今回このように深雪さんに同行させて頂きました」

「初めまして。小西要こにしかなめといひます。あの、ひよつとしてあの有名な探偵の毛利さんですか？」

「いやあーやはりバレてしまいましたかー！いかにも。わたくし『眠りの小五郎』こと名探偵の毛利ここ」

「やっぱり！智也くんの事件の調査ですか！？」

誇らしげに胸を張って、自信満々で言ったいつもの決めゼリフを勢い良く要に遮られ、ひるむ小五郎。

「え、あ、いえ・・・深雪さんのお姉さんの京香さんを捜してまして・・・」

たどたどしく口に出した小五郎の答えに、要はあからさまに残念そうな顔をした。

「なあんだ、つまんないの。殺人事件の調査かと思って期待したのに」

「ちよっ・・・あんたねえ！その言い方は・・・」

「ま、上がって下さい。先に部屋へ案内しますから」

小五郎の反論も聞き流してさっさと背を向けた要の態度に、コナンは憤りごみんおを感じた。

——なんなんだ？この人。ウワサ好きそうというか、不謹慎というか・・・深雪さんに失礼だろ。

ちらりと深雪を見やると、彼女は唇を噛んでじつとたたずんでいた。

早くも一同は、この同窓会の不穏な空気を無意識のうちに感じ始めていた。

page 3. 悲鳴(前書き)

お久しぶりです。8ヵ月ぶりの更新ですので、前回までの内容を忘れていた方やお手数ですが最初から読み返して頂かないと話が繋がらないと思われます。(文章自体は8ヵ月前のままで、改変はしていません)

「ほんと久しぶりね、深雪ちゃん」

そう言って深雪に笑いかけたのは、大人しそうな女性だった。

彼女の名は竹下^{たけした}リエ。25歳の主婦で、同窓会参加者の一人である。

「京香が失踪してから大変だったからな・・・何となく疎遠になっちゃってたよな」

同情的な表情を浮かべるのは、同じく同窓会参加者の岡林^{おかばやし}祐介。ジムのインストラクターをしていると自己紹介した通り、いかにもスポーツマンといった色黒で健康的な印象の人物だった。

「そうですね・・・でも6年ぶりにまたこうやって皆さんと会えて、すごく嬉しいです。誘って頂いてありがとうございます」

コートを脱ぎ、赤いマフラーとグレーの手袋を外して膝の上に置きながら、深雪は穏やかな笑顔を返して言った。

「もう6年かぁ・・・早いわね。京香ったら、一体いまどこで何してんのかしら」

呆れたように呟いた^{かなめ}要。
するとまた別の人物が口を挟んだ。

「京香の失踪もだけど、でもまさか智也が殺されるなんて・・・驚いたというか、ショックというか・・・」

前川駿と名乗ったこの男性は、細身で神経質そうな見た目である。
まえかわしゅん

コナンたち一行が別荘のリビングに顔を出したとき、すでに集まっていたのが以上の4人だった。

一通り自己紹介を済ませ、思い思いにソファに腰掛けて世間話が始まっている。

またもや要の、うるさいくらい大きな声が響いた。

「そうよ、智也くん！ビックリよね、殺されるなんて！！」

「6年ぶりにみんな集まるこの同窓会を楽しみにしてた矢先だったからな。俺もショックだよ。同窓会より前に、あいつの葬式でみんなと再会するなんて悲しすぎるぜ」

岡林が暗い顔で足を組み直す。

「智也くんてあんまりサークルには来なかったけど、ムードメーカーで盛り上げ上手だったからね……。同窓会中止にしようかって話にもなったけど、せっかくだし京香や智也くんの思い出話ができれば、と思って計画通りにしたのよね」

リエが、目に涙を溜めてしみじみと言った。

「そういえば毛利さんたちは、失踪した京香の手掛かりを探しにいらしたんですね？」

同窓生たちの思い出話を輪の外から傍観していた小五郎たちに、い

きなり要が近づいてきた。

「え、あ、はぁ・・・」

何故か口元を緩めた要は、戸惑う小五郎に更に近づき、耳元で小声を出した。

コナンもそれとなく話が聞こえるように耳をそばだてる。

「実はね、ここだけの話、この間殺された智也くんと京香って付き合ってたのよ」

「ええ！？そ、それは本当ですか！？」

——なんだって！？

側にいたコナンや蘭も、驚きの表情になる。

小五郎の声に、他のメンバーも気づいて視線を向けたが、予想通りの反応が得られて調子に乗ったのだろう、要は気にする風もなくさらに楽しそうに続けた。

「サークル内ではみんな何となく気づいてたんですけどね。だから京香が失踪したとき私思ってたんですよ！何か智也くんが関係してるんじゃないかって」

新しい情報だった。きっと深雪もそこまでは知らなかったのだろう。コナンが深雪を見やると、彼女もまた目を見開いていた。

「でも今度は智也くんが殺されたでしょ？だからその犯人ってひょっとしたら京香なんじゃないかってもっぱらのウワサ・・・」

「さすが我がサークル一のウワサ好き女、要。変わってないわね」

突然背後から割り込んできた声。

一同が驚いて振り返るとそこには、白い上品なコートを着込んだ茶髪的女性が、いつの間にか開かれたドアの前に立っていた。

「りっちゃん！」

「律子じゃない！」

「いつの間に来てたの？ていうかどうかやって入ったのよ？」

律子と呼ばれたその女性は、薄い笑いを口元に浮かべながら、ふつと息を吐いて床に荷物を下ろした。

「勝手知ったる他人の家・・・ってね。玄関のカギ開けっ放しだったけど」

「あ、いけない。さっき毛利さんたちを出迎えたとき掛け忘れてた・・・」

ばつが悪そうに苦笑いした要に、律子も苦笑いを返す。

そしてコートを脱ぎながら小五郎たちに向き直った。

「初めまして。深雪ちゃんの付き添いの方ですよね。篠崎律子しのざき りつこです。旅行会社勤めてます」

愛想よく微笑んだ律子は、肩まで伸びたゆるいパーマヘアにすらりとした長身の、小奇麗な女性だった。

美人にめっぽう弱い小五郎が、早速鼻の下を伸ばす。

「こちらこそ初めまして。わたくし名探偵の毛利小五郎と申します！この度はですね、こちらにいらっしゃる安達深雪さんのお姉さんを探すお手伝いをさせて頂いてまして、是非あなたのような方にじっくりお話を伺いたいと思っんぎょー！」

蘭がさりげなく、しかししっかりと小五郎の足を踏んだ。

涙ぐんで言葉を失った小五郎を不思議そうに見ていた律子だったが、やがて再び要を振り返って呆れた声で言った。

「まったく、あんたね、根拠もないウワサばっかペラペラしゃべるのよしなさいよ。6年も前に失踪した京香が、何でいまさら智也くんを殺さなきゃならないのよ」

「全く根拠ないわけじゃないわよー！もしかしたら家出してから智也くんにつっとかくまわれてた京香が、揉めて殺したって可能性だってあるじゃない！」

「だからって、深雪ちゃんの前でそんな無神経なこと言わないの」

冷静に諭す律子と、拗ねたようにムキになる要。

その言い合いを遮るように、小五郎は慌てて話題をそらした。

「これで全員揃われたんですか？」

その問いに、律子がソファに腰掛けながら部屋を見回して答える。

「ええっと……いいえ、まだね。結城が来てないわ」

「結城さん……ですか？」

「ええ。結城大^{ゆいぎだい}。我がサークルで唯一の医学部だった天才」

「今は医者だもんな。すげえよ」

前川が、ずれたメガネを直して言った。

心なしか、羨む^{うらや}気持ちちがこもっているように聞こえる。

「あ、覚えてます。確かご実家が病院やってらっしゃる方ですよね？」

身を乗り出して、深雪が口を挟んだ。

「そうそう、結城病院の一人息子のお坊ちゃん。確かまだ研修医だったと思うけど」

「頭良いだけじゃなくてスポーツも万能。おまけにイケメン。完璧人間だよな」

「モテてたわよねー彼。私も玉の輿^{こし}狙^{ねら}ってたけど相手にされなかったわ」

岡林と律子が冗談交じりに言葉を交わし、皆を笑わせた。

和んだ空気の中、更にしばらく雑談で盛り上がって一同がすっかり寛^{くつろ}いでいた頃だった。

玄関のインターホンが高らかに鳴る。

「きたきた!」

「王子様登場ってか?」

最後の来訪者に、皆が興奮気味に玄関へ通じるドアに目をやる。

「私、出迎えてくる！」

小走りに要が出て行き、少しして男性を連れて戻ってきた。

「遅くなってごめん」

爽やかな身のこなしで入ってきた男性は、いかにも知的そうな好青年だった。

身につけているコートやマフラー、細身のパンツからニットセーターにシャツまで、シンプルなデザインだがよく見ると一つひとつ凝った作りで、年相応だが非常にセンスの良い身なりをしている。

さすが、先ほど同級生たちが褒めそやしていただけのことはある青年である。

「ちょっと結城！遅いわよー」

律子は待ってましたとばかりに席を立て、結城の背中をバシッと叩いた。

「いて！律子、相変わらずだな」

あっはっは、と豪快に笑い飛ばし、律子が腕を引っ張って同級生の輪の中に招き入れた。

皆から、温かい声で歓迎される結城。

ふと、結城が深雪のほうを向いて声を掛けた。

「やあ、深雪ちゃん。久しぶり。京香を探してるんだって？」

「あ、えっと、はい！」

爽やかな笑顔で微笑みかけられて、ぽーっと結城を見上げていた深雪は慌てて返事をした。

心なしか、頬が赤く染まっているように見えた。

その夜。

久々に集まってじっくりと話す機会を持った同級生たち6人は、大いに盛り上がり、語り合った。

主に女性陣が全員分の夕食を作り、男性陣はその間に風呂を沸かしたり暖炉の薪を準備し終え、楽しい夕食の時間が始まった。

豪華なディナーの並ぶテーブルに、同級生たちは大学時代の写真を広げ、思い出話に花を咲かせる。

「この頃の要の髪型、だっさーい」

「もー！なんでそういうこと言うのー！」

「駿、お前なんでどの写真も笑ってねーんだよ」

「写真好きじゃないんだよ。なのに、好き勝手パシャパシャ撮りまくるヤツいたよなあ。まあ、名前は出さないけどリエだよな」

「ひっどー！名前出してんじゃない！」

絶えず笑い声が響く。

写真の枚数も半端ではないが、その写真から出てくる思い出のエピソードの多さが、当時のサークルの仲の良さを物語っていた。

コナンたちも、深雪と一緒に何枚か写真を眺めてみる。

「この頃から、結城さんって素敵ですね」

結城がバスケットボール片手に汗を拭っている写真を取り上げて、蘭が深雪に話し掛けた。

何故かちよつと頬を染めて、小さな声で「そうですね」と答える深雪。

さっきから深雪が、斜め向かいの席に座る結城のほうをチラチラ見ているのに、蘭は気付いているようだった。

一方、コナンと小五郎は主に失踪した京香が写っている写真を中心に観察した。

先日深雪が初めて探偵事務所に依頼に来たとき見せた姉の写真は、どうやらこのサークル活動中の1シーンだったようである。

この場に広げられた大量の写真の中でも、京香は満面の笑みを浮かべている。

大きく腕を伸ばし、ラケットを振る瞬間の写真。岡林と、ふざけてバレーボールを奪い合っている写真。汗を拭いながら、恥ずかしそうにタオルで顔を隠そうとしている写真。壁際に座り、数人で楽しそうに談笑している写真。そして、まだ幼い深雪との体育館でのツーショット……。

深雪は、一体どんな気持ちでこのたくさんの写真を眺めているのだろう。

コナンはそんなことを思った。

そのとき、また別のツーショット写真が出てきた。

「あ、ねえリエさん。この人がこの間殺されたっていう智也さん？」

隣に座っていたリエに、コナンが写真を見せて尋ねた。

京香と、この場にいない男性が一つのベンチに腰掛けてカメラに向かってピースしている写真だった。

「そうそう。摂田^{せった}智也くん。この二人特に仲良かったから、こういうツーショットの写真多いと思うわよ。・・・やっぱり付き合ってたのかしらね」

リエの最後の一言に気付いて、深雪がちらりとこちらに目を向けて曖昧^{あいまい}な表情になった。

だが彼女はすぐに目を逸らして適当に別の写真を取り上げた。その時だった。深雪が声を上げたのは。

「あ！」

「どうしたの？ 深雪ちゃん」

「この写真で姉がしてるピアス・・・私、覚えてます！ いつも付けてました」

「そうだったけ？」

「あー。そういやしてたなあ、確か。花のついたヤツ」

「飾りがぶら下がってるヤツだろ？運動するときもずっと付けてたから、引っかかったら危ないぞって注意した記憶あるぜ、俺」

駿や岡林も、思い出したように賛同する。

「でもこのピアス、家に残ってた姉の荷物の中に無かったんです。だからもしかしたら、失踪したときも耳に付けたままだったかも・・・」

コナンはすかさず写真に群がる同級生たちの間に割って入り、深雪の手元の写真を覗き込んだ。

京香の顔のアップが写っている写真で、きつと不意打ちで撮られたのだろう、片手で髪をかき上げながら、少し驚いた顔で笑っている。かき上げられた髪から覗く左耳に、金色の金具に花とガラス玉の飾りが付いたピアスが光っていた。

じっと写真を見ていたリエが、隣で黙っている要に声を掛けた。

「思い出した。確かに京香、いつもこのピアス付けてたわ。ねえ要？」

「え！？・・・あ、そうね。付けてたかしらね。よく覚えてないけど・・・」

唐突に話し掛けられ、要がぎくりと不自然な反応をしたのを、コナンは見逃さなかった。

夜も更け、いつの間にやら外は吹雪になっていた。

風が強くなり、別荘の大きな窓をガタガタ揺らし始めた頃、楽しかった夕食の時間もようやくお開きとなった。

テーブルを片づけると、みんな風呂や寝具の準備をしに、一旦2階の自室に戻ったり、洗面所へ行ったりして散り散りになった。

しばらくしてから蘭と深雪は、残った食器を洗いがてら、全員にコーヒーを淹れるために揃ってキッチンに入った。

コナンと小五郎は何となくリビングのソファに座り、再び先ほどの写真の束を順番に眺めていた。

写真の中で楽しそうに動き回り、笑っている深雪の姉・京香。

この直後に失踪するなど考えられないほど、明るい表情ばかりだった。

その彼女とよく並んで一緒に写っているのが、先日何者かに殺害されたというもう一人の同級生・智也である。

ヒゲを生やしているせいだろうか、写真で見える限り、同級生にしては他のメンバーより少し大人の雰囲気がある。

確かにしゅっちゅう京香との仲の良さそうなツーショット写真があった。付き合っていたと言われても違和感がない。

コナンは、彼の死と京香の失踪の関連に頭を巡らせた。

——この二人に何らかの事情があったとしても、京香さんの失踪と智也さんの死には6年も間が開いている。同じ事件に巻き込まれたとは思えないが・・・この2つの事件に関連性が全くないとも思えない。だからって、あの要さんが言うように、どこかで生きて

いる京香さんが智也さんを殺害したなんてことは考えたくねえし・
・くそ！手掛かりが全くねえ！

悔しそうに、写真をテーブルに置く。

その写真を、今度は小五郎が手に取った。

「こいつだろ？こないだ殺されたっていう同級生。なーんかガラ悪
イよなあ、いっちゃまえにヒゲなんか生やして。しかも無職でフラ
フラしてたっていうし・・・」

「確かに智也くん、当時からあんまり良いウワサありませんでした」
いつの間にやら、リエと岡林が並んでリビングに入ってきていた。
小五郎の隣に腰掛けながら、リエが言葉を続ける。

「授業もそんなにマジメに出てなかったし、どこかで悪い遊びして
るんじゃないかってみんな心配してたんです」

「サークルで遊んでるときはふざけ合ったりして、普通に良いヤツ
だったけどな。裏で何してるかなんて聞けねえし」

岡林も、難しい顔で向かいに腰を下ろした。

「で、毛利さん。なんか京香につながる手掛かりとか見つかりまし
たか？」

「いやあそれが全く・・・。みなさんの楽しそうな思い出話を聞け
ば聞くほど、失踪する理由が見当たらんのですよ」

小五郎はチラリとテーブルの上の写真たちを見て、溜め息をついた。

「ねえ、リエさんに岡林さん。よかったら京香さんや殺された智也さんのこと、もっと教えてくれない？」

コナンがニツコリと笑いかけて頼むと、二人は表情を緩めて頷いた。

「ええ。もちろんよ」

その頃、壁一枚隔てた隣のキッチンでは。

「やだ、吹雪いてきてる」

「ほんとですね」

目の前の大きな窓から外の吹雪を見ながら、蘭は残った洗い物を片づけていた。

深雪は隣の戸棚から、人数分のコーヒーカップを取り出している。

「あ、蘭さん。コナンくんてコーヒー飲めますか？冷蔵庫にジュースもありますけど・・・」

深雪の問いに、蘭は振り返って笑いながら言った。

「ああ、大丈夫、大丈夫。あの子小学生のくせに平気でブラックコーヒー飲むから」

「そうなんですか？大人ですねー。私なんてミルクと砂糖ナシじゃ飲めないです」

「ませてんのよねえ。変な子なのよ。私の幼馴染も小さい頃からブラック飲んでたけど、やっぱり変なヤツだった」

トレイとカップを調理台に置きながら、深雪はからかうように蘭の顔を覗き込んだ。

「その幼馴染って、例の新一さんですか？蘭さんがずっと待ってるっていう」

「なっ・・・別にそんな、待ってるとかじゃないけど・・・！」

赤面して慌てる蘭を見て、深雪がクスクス笑う。

蘭はよけいに恥ずかしくなって、何も言えなくなってしまった。

ひとしきり笑った深雪は、ふいに俯くと、トレイにコーヒークップを並べながら静かに言った。

「ねえ蘭さん。どこにいるかわからない人を待ってるのって・・・疲れませんか？」

「・・・深雪さん」

蘭には、深雪の言いたいことがわかった。

「姉はどこかで生きてる、絶対また会えるって信じてます。でも、もう何年もそうやって自分を奮い立たせると、それだけが心の支えになってしまっただけ・・・もし、その・・・もう会えないって事

実を突き付けられたとき、自分はどうなってしまっただろうって不安になるんです」

いつの間にかカップを並べていた手は止まり、声が震えていた。

「いなくなってから年数が経てばたつほど、希望は薄くなります。だから余計にその不安を考えないようにしようとする、たまに・・・気が変になってしまいそうになるんです。疲れるんです。すごく辛いんです」

蘭は、深雪に掛ける言葉が見つからなかった。彼女の言葉が、蘭の心にも深く突き刺さっていたからだ。

新一は、失踪してからほんの数回姿を見せてくれたことがあるし、たまに電話もよこす。

だが、それが途切れたら・・・連絡が来なくなって、本当に生死さえわからなくなって、帰ってこない人をひたすら待つ立場になったとしたら・・・

果たして、自分はちゃんと地に足を付いて、立っていられるのだろうか・・・？

長い沈黙が続く。

コーヒーマーカ―が沸く音が空気を振動させ、そこに蛇口から水滴が落ちる音が不規則に混じる。

やがて、蘭が何か言おうと口を開きかけたときだった。

「ねえ、りっちゃん来なかった？」

ガチャリといきなりドアが開き、要が顔を覗かせた。

はじかれたように振り返る、蘭と深雪。
その様子に、要は少し驚いた顔をした。

「あ・・・律子さんですか？さあ。私たち30分くらいここにいますけど、誰も来てないですよ。ねえ深雪さん」

「はい。そういえば夕食が終わってから見かけてないです」

「そう、ありがとう」

要は礼を言ってから、困った顔でぶつぶつ言いながらキッチンを出て行った。

「変ねえ。待ち合わせてたのに、部屋にもどこにもいないのよ・・・」

要が出て行ってから、ぽつりと深雪が口を開いた。

「ごめんなさい、蘭さん。変なこと聞いたりして」

「ううん、気にしないで。さ、早く洗い物終わらせちゃお！」

「はい！」

蘭の言葉に再び明るさを取り戻した深雪は、食器を洗う蘭を手伝い始めた。

しばらくのち、あらかた泡を流し、調理器具をふきんで拭いていた蘭は、あることに気付いた。

「あれ？包丁・・・」

「どうしました？蘭さん」

深雪が蘭のほうに視線を向ける。

「さっき夕飯作ったとき、包丁って3本あったと思ったんだけど・・・お肉を切ったのと、野菜を切ったのと、フルーツを切ったのとで3本」

「はい。確か3本ありました」

蘭はきよろきよろと流しや調理台を見回した。

「なのに、2本しかないのよ！もう1本どこいったんだろう・・・？」

深雪もその言葉を聞き、不思議に思って周りを見回した、その時だった。

きゃあああああああああ————

どこからか、耳を塞ぎたくなるような悲鳴が聞こえた。

page 3. 悲鳴（後書き）

読んで下さってありがとうございます。お久しぶりです。すみません。8ヵ月も間が開いてしまいました。中国語のテストに落ちたり罨に落ちたり溝に落ちたり、不遇な人生を送っておりました。

ようやく話が動き出しました。予想して頂けると思いますが、この流れは『山の上の別荘↓事件↓吹雪↓大雪で電話が通じないor通報しても雪で警察が来れない』という王道パターンです。しかもその場合、高確率で吊り橋が落ちます。

page 4. 惨状

「・・・!？」

「え、今の・・・悲鳴？」

深雪と欄は、突然の出来事にその場で体を硬直させた。

「誰の声でしょう・・・一体何が・・・？」

すると隣のリビングから、バタバタという慌ただしい足音と、「2階からだ!」という小五郎の切羽詰まった声が聞こえてきた。

「私たちも行ってみましょう!」

蘭の言葉に深雪も頷いて、二人は揃ってキッチンを出た。

ちょうどリビングから、小五郎とコナン、岡林、リエの4人が玄関ホールへと出ていくところだった。

コナンたちがリビングから一旦玄関ホールへ出て、2階へと続く階段を駆け上がると、廊下の一番奥に、悲鳴の主と思われる律子が、恐怖に顔を引きつらせて座り込んでいるのが目に入った。彼女は向かって左側の部屋のほうへ体を向けて、口をパクパクさせている。

その部屋は確か、要に^{かなめ}割り当てられているはずの部屋だった。

悲鳴を聞きつけたのだろう、自室から結城や駿も出てきた。
そして律子に駆け寄ると、2人とも要の部屋を覗き込んで息を飲んだ。

——まさか・・・まさか！

コナンの胸に、嫌な予感がどんどん大きくなっていった。
やっとの思いで要の部屋に辿り着き、明かりのついた室内に目を走らせる。

「・・・！！」

言葉を失った。

そこには床の絨毯じゅうたんの上に、要がうつ伏せに倒れていた。

彼女の白いセーターは血まみれで、室内も血の海だった。

そして赤黒い血だまりの中に、同じく血でべっとりと汚れた包丁が、部屋の明かりを反射してキラキラと光っている。

「なんてこった・・・！！」

小五郎が、コナンの背後で苦々しく言った。

少し遅れて駆けつけた深雪や蘭も、この惨状を目にして短く悲鳴をあげた。

「うそでしょ・・・要え！」

「そんな・・・なんでこんな・・・」

同級生たちも声を震わせて、その場に立ち尽くすことしか出来なかった。

急いで要に駆け寄った小五郎が頸動脈を確かめたが、すでに血液の流れは止まっており、体も冷たくなりはじめていたようだった。

死因は恐らく、胸を刺されたことによる出血多量。現場に転がっていた凶器は、キッチンからなくなっていた包丁だった。

小五郎は一同に、部屋に入るなど指示を出し、とりあえず外の廊下に待機させた。

まだ信じられないように茫然としている者もいたが、律子とリエは悲しみと恐怖で声をあげて泣いていた。

——ちくしょう・・・何かが起こりそうな空気は感じてたのに・・・！

コナンは目の前で起きてしまった殺人に、悔しさで拳をぎゅっと握りしめた。

「要さんは、すでに息がありませんでした。したがってこれは、殺人事件です。これからは私の指示に従ってもらいます」

小五郎が冷静な、しかし厳しい声で言う。

「律子さん、あなたが第一発見者ですね？どのような経緯で要さんの死体を発見されたんですか？」

未だ腰を抜かしたままの律子は、蘭に支えられながら涙声で叫んだ。

「夕食のあと、要と二人で話そうってことになって、要の部屋へ来たんです。ドアの隙間から電気が点いてるのがわかったので呼びかけたんですけど返事がなくて・・・そしたら鍵が開いてて、ドアを開けたら要が・・・要が倒れてて！」

「それで悲鳴をあげたというわけですな」

「は、はい」

何の前触れもなくいきなりショッキングな現場を見てしまった律子は、相当ショックが大きかったのだろう。

なかなか立ち上がることが出来ず、ガタガタと体中を震わせていた。だが、今の律子の心理状況は、どうもそれだけではないように、コナンは感じた。

怯えて、涙を流して悲しんでいるのだが、しきりにキョロキョロと同級生たちを見回しているのだ。

その挙動不審を察知したコナンが、気になっていたことを問いかける。

「ねえ律子さん。要さんと二人で話すことになってたんだよね？でも要さんが殺される前に、律子さんのこと探して回ってたみたいなんだけど、どこ行ってたの？」

思いつめた表情で黙っていた律子は、ギクリと肩を震わせた。

「え!？要、私のこと探してたの・・・？」

そうなのだ。要は殺される前、コナンたちのいるリビングに入ってきて『律子を見なかったか』と尋ねたのである。

その場にいた全員が『知らない』と答えると、今度はリビングを突っ切ってキッチンのドアを開け、深雪と蘭にも尋ねていた。

「うん。律子さんの悲鳴が聞こえる数十分前だったと思うよ。別荘中探してたみたいだけど、どこにいたの？」

「べ、別にどこって・・・自分の部屋にいたわよ」

すると、律子の肩を支えていた蘭が口を挟んだ。

「え？私と深雪さんもキッチンで要さんに聞かれましたけど、確か『律子さんと待ち合わせしてるのに部屋にもどこにもいない』って言ってましたけど・・・」

「・・・！」

律子の顔が、さっと青ざめた。

「そういえば、確かにそう言ってました」

深雪も蘭に賛同する。

しばらく青ざめたまま俯いていた律子だったが、やがて思いついたように顔を上げて言った。

「あ、実は私、うっかり部屋で寝てて・・・たぶん要がノックしたの気付かなかったんだと思うわ。目が覚めて、待ち合わせしてるの思い出して慌てて要の部屋に来たの」

「ふうん・・・」

鋭い目で律子を見るコナン。

確かに筋は通っている理由だったが、律子が無かを隠しているか、取り繕っているのは明らかだった。

「・・・で、他の皆さんは律子さんの悲鳴が聞こえるまでどこにいらしたんですか？」

小五郎が、その場の全員を見回して言う。

「ちょ・・・俺たちを疑ってるんですか!？」

「私たちが要を殺すわけじゃないじゃないですか!」

一斉に非難の声があがる。

しかし小五郎は強い口調で一喝した。

「あくまで参考です! あなたたちは容疑者ではないかもしれないが、立派な関係者だ。捜査に協力して下さい!!」

一瞬、一同は驚いて口をつぐんだ。

やがで、結城がおずおずと口を開いた。

「僕は夕食の片付けが終わってから律子の悲鳴を聞くまで、ずっと自室にいました」

続いて、駿も早口に答える。

「僕も結城と同じです。1人で部屋にいました」

「なるほど。で、律子さんも部屋で寝ていた、と」

「・・・はい」

結城の部屋は殺人現場である要の部屋の向かいで、廊下の一番奥だった。駿の部屋は結城の隣で、律子の部屋は要の隣である。

「私と深雪さんは、ずっと一緒にキッチンにいたわ」

蘭が深雪と頷き合いながら言う。

それを聞いて、コナンも口を開いた。

「僕とおじさんと、リエさんと岡林さんはリビングにいたよね」

小五郎は情報を整理するように目を閉じて考える。

「あー、つまりだな、アリバイがないのは結城さんと前川さんと律子さんってことになりますなあ。要さんは律子さんを探してリビングやキッチンに顔を出したあとにこの部屋で殺されたわけですから、俺たち4人とリエさん、岡林さんの計6人には、実質的に殺害は不可能だ」

「な・・・！結局疑ってるじゃないですか、参考だとか言って！」

駿が顔を真っ赤にして声を荒げる。

小五郎はそんな彼をチラリと見やりながら適当にあしらっていた。

——確かに、おっちゃんの言う通りだ。要さんはリビングやキッチンに律子さんを探しにきた直後に殺されたはずだから、悲鳴を聞いて駆け付けるまで一緒にリビングにいた俺とおっちゃんとりエさん、岡林さん、それと隣のキッチンにいた蘭と深雪さんにはアリバイが成立する……。

怒り狂って小五郎に食ってかかっている駿を、結城がなだめていた。律子は相変わらず青い顔でそわそわしている。

見るからに、律子が怪しい。そう思ってコナンが律子を凝視していた、その時だった。

突き刺すように冷たい風が、頬に当たった。

——……隙間風？ いや、違う……窓が！

廊下の一番奥に取り付けられた大きな出窓が、片側だけ開いていた。

「ねえ！ あそこの出窓開けたのって誰！？」

コナンの切羽詰まった声に、全員が出窓を振り返る。だが誰も、自分が開けたと名乗り出る者はいなかった。

「一体いつから開いてたんだ……？」

岡林が、不審そうに出窓に近づく。

窓の向こうには、別荘に来たときに見えた大きなモミの木が、激しい吹雪にその枝を揺らしていた。すると、風にあおられてぶらぶら揺れている半開きの窓ガラスを見

た岡林が、いきなり声を上げた。

「おい！この窓、外から割られてるぞ！！」

「なんだって！？」

小五郎とコナンをはじめ、数人がどやどやと出窓に近づく。

確かに開かれた片側の窓ガラスが、割られて拳大くらいの大きさの穴が空いていた。

そして窓の内側のカウンター部分には、赤い花の活いけてある花瓶の周りに、細かいガラスの破片が散らばっている。

しかも割られているのは、窓ガラスの内側に取り付けられた鍵の、すぐ横の部分だった。

「これって・・・犯人がガラスを割って鍵を開けて、この出窓から侵入したってこと・・・！？」

今までの経験からこのような痕跡を見慣れている蘭は、すぐに察して一歩後ずさった。

「でもここ、2階だぞ！？ベランダもないし、一体どうやって・・・」

蘭に向かってそこまで言いかけて、ふと何かに気付いた小五郎は、はっとした顔で出窓を振り返った。

「まさか・・・この木か！？」

彼の目線の先には、窓に届きそうなほど枝を伸ばしてそそり立っている、大きなモミの木があった。

雪をまとった枝の間から見える太い幹は、出窓からでも簡単に乗り移れそうなほど、建物に隣接している。

——この木を登って出窓から侵入したとすれば・・・！！

コナンは軽々と出窓のカウンターに飛び乗ると、開いている窓から身を乗り出して、モミの木の根元の地面に目をこらした。

膝が当たって、カウンターの上の花瓶がぐらりと倒れそうになる。側にいた結城が、とっさに花瓶を受け止めた。

だが、そんなことは気にも留めず下を覗き込んでいたコナンは、すでに決定的なものを見つけていた。

——・・・やっぱり！

「ちょっとコナンくん、危ないって・・・」

慌てた蘭に抱えられて無理矢理カウンターから降ろされたコナンだったが、それでもなお手足をジタバタさせながら小五郎に向かって叫んだ。

「おじさん！モミの木の下に、いっぱい足跡がついてる！！」

「なにィ！？」

すぐに小五郎もカウンターに手をついて窓から顔を出し、地面を覗き込む。

「ほ、ほんとだ・・・」

2階からでは吹雪に遮られて地面は見づらかったが、それでも、モミの木の下、厚く積もった雪の上に、足跡らしきものがいくつも点在しているのが確かに確認できた。

「みなさんはここで待機していて下さい！蘭、みんなを頼むぞ！」

そう言う小五郎は踵を返し、階段に向かって廊下を勢いよく走りだした。

小五郎の言葉に驚いて一瞬気が緩んだ蘭の腕から逃れ、コナンも全速力でそのあとを追う。

「あ、ちょっと・・・コナンくん!？」

背後から、戸惑ったような蘭の声だけが追いかけてきた。

階段を下りて玄関から吹雪の寒空へと飛び出したコナンと小五郎は、真っ直ぐに反対側のモミの木へと向かった。

相変わらずの激しい吹雪で、視界が霞む。

今歩いている自分たちの足跡も、すぐに消えてしまうだろうと予想できるほどの雪だった。

なんとか、木の下まで辿り着いた。

2階の出窓から見ると、さっきまで二人が顔を出していた出窓が見えた。

別荘を見上げると、さっきまで二人が顔を出していた出窓が見えた。そして足元には、木の根元の雪に残っている、何者かの痕跡。

近くで見ると、やはり人間の足跡に間違いなさそうだった。

小五郎が腰をかがめ、雪の上に乱雑に残ったそれを眺めながら言う。

「やっぱり犯人はこっからこの木に登ったんだろうな」

「でも木の下その他には足跡は残ってないみたいだね」

一面の雪景色を見回して、コナンが言った。

「こんだけ吹雪いてりゃあ、とっくに消えてるわな・・・」

かがめていた半身を起こし、小五郎ははあっと白い息を吐いた。辺りには、ぴっちりときめの細かい雪が平たく敷き詰められているだけだった。

——くそっ・・・もう少し早く気付いてれば、ここ以外の足跡も残ってたかもしれねえのに・・・

コナンは心の中で舌打ちをする。

モミの木の下は、枝や葉で多少雪が遮られるため、奇跡的に足跡が残っていただけのようだった。

木の周辺以外の地面は、雪を遮るものが何もないため、他にも残っていたはずの足跡は、完全に雪に埋もれてもはや見つけることは不可能だった。

そのため、かろうじて残っているこの足跡の主がどの方向から来たのか、また、どこへ行ったのかも、今となってはわからない。

「となると、外部犯かぁ・・・ひょっとしたら侵入した犯人がまだ別荘内に潜んでるかもしれねえな。とりあえず戻って、全員で見回るか」

「そうだね」

小五郎の言葉に頷き、コナンは一応、いつ消えてもおかしくない木の下
の足跡を携帯のカメラで撮影して、証拠として保存した。

二人が玄関へ戻ろうと歩き始めたときだった。

「お父さん！コナンくん！」

突然、頭上から蘭の声が降ってきた。

声のするほうへ顔を上げると、先ほどの2階の出窓から、蘭が顔を出して、切羽詰まった様子でこちらを見下ろしている。

「早く戻ってきて！要さんの部屋に、ピアスが！！」

小五郎とコナンが急いで2階に戻ると、一同はなぜか気まずそうに押し黙っていた。

そしてその中心で、深雪が茫然と殺人現場の入り口に立っていた。

「ピアスがどうしたって？」

小五郎が蘭に問う。

蘭は深雪の視線の先、要の死体が横たわっている辺りを恐る恐る指差した。

「さつき結城さんが見つけたんだけど、あそこ・・・要さんの右手のところ」

言われたところに目を凝らすと、ちょうど死体の手の陰になっている床の上に、何か光るものが見えた。

コナンが一步部屋に入って、その正体を確かめる。

「こっ・・・これって・・・!!」

ぱっと深雪を振り返るコナン。

深雪は真っ青な顔で、ガクガクと震えたまま立ち尽くしていた。

そこに転がっていたのは、花とガラスの飾りのついた、片方だけのピアスだった。

そう、夕食時に写真で見た、失踪した深雪の姉・京香のお気に入りだったピアスである。

「なんでこんなところに・・・？」

小五郎も衝撃を受け、やっとのことで声を絞り出した。

———そんな・・・こんなことって・・・これじゃあまるで・・・!!

コナンの頭に、信じられない、信じたくもない考えがよぎる。

その考えはコナンの中で、靄もやのように渦巻いていたが、次のリエの一言で、はつきりとした形となって頭をもたげた。

「まさかこの部屋で要を殺したのって・・・京香・・・？」

混乱する空気の中、リエがか細い声で、誰もが思っている推論を口にした。

「・・・お姉ちゃん！」

深雪の絶望の叫びが、静まり返った惨状に虚しく響いた。

「蘭、キッチンから包丁が無くなってたのはいつからだっただ？」

「さあ・・・。律子さんの悲鳴が聞こえる直前に、調理器具を片付けてるときに初めて気付いたから、いつからだったか具体的にはわかんないけど・・・みんなで夕食を作ってる時には確かに3本あったはずよ」

「じゃあキッチンから包丁が持ち出されたのは、夕食を作り終わってから、蘭と深雪さんが洗い物を始めるまでの間ってことだな」

「うん、たぶん」

小五郎と蘭がそんな会話をしている横で、ソファに座った深雪は肩を震わせて泣いていた。

ヒックヒックという嗚咽の音が、絶えず辺りに響いている。

一同は要の遺体にとりあえずシートをかぶせ、割られた出窓は戸棚の板で塞いで応急処置をしてから、現場を離れて1階のリビングに集まっていた。

吹雪は収まることなく、窓の外は相変わらず真っ白である。
時刻は深夜になろうとしていた。

暖炉で火を焚いていても、夜の冷え込みと、要が殺害されたという恐怖から、みな体の芯まで冷え切っていた。

ガチャリとリビングの扉が開き、結城が眉間に皺しわを寄せながら入ってきた。

「どうでしたか？」

小五郎が問いかけると、彼は首を横に振る。

「だめでした。おそらくこの吹雪のせいでしょうが、雑音が入ってしまっただけで電話が通じません」

「そうか・・・この山の中じゃあ携帯電話も圏外だしなあ・・・」

小五郎は溜め息をついて頭を抱えた。

すぐにでも警察に来てほしかったのだが、案の定、吹雪で電波が乱れているらしく、別荘の固定電話は通じなかった。

この天候では下山も無理である。

「朝になるまでには止むでしょうから、それから通報するなり下山して交番に行くなりするしかないですね」

岡林が言うと、隣に座っている駿が苛立たしげに舌打ちをして短く息を吐いた。

律子も頭を掻く。

「最悪だわ。なんでこんなことに・・・」

しばし、沈黙が訪れる。

深雪は未だ、声を押し殺して泣いていた。

律子はその様子を見つめながら、イライラした様子で足を組み直したり、手が冷たいのか、息を吹きかけてはしきりに両手をこすり合

わせたりしていた。摩擦で、指先が真っ赤になっている。

気まずい空気の中、リエが俯いたまま、それまで誰も触れずにいた話題を口にした。

「ねえ・・・京香のピアスが部屋に落ちてたってことは、やっぱり京香が要を殺したの・・・？」

一同が、ギクリと反応してリエと深雪を交互に見た。
だが次の瞬間、突如として声を荒げた律子に、全員が度肝を抜かれた。

「うるさいわね！何回おんなじことばっか言ってるのよ！」

バンッとテーブルを叩いて立ち上がる律子。リエは驚いて言葉を失った。

「あんたがそう思うんならそうなのよ！京香がここに侵入して、要を殺して逃げたの！！きつとこの間、智也くんを殺したのも京香よ！6年前に失踪してから、ずっと私たちに復讐を・・・」

「姉はそんなことしません！！」

それまでずっと黙っていた深雪が、きつい口調で律子を遮った。
その目からは、滂沱^{ほうた}の涙が流れ落ちている。

「殺人現場に姉のピアスが落ちていたっていうだけじゃないですか！姉は、例えばどんな理由があっても復讐したり、ましてや人を殺すような人間じゃありません！！」

何か言い返そうと口を開きかけた律子だったが、自分を真っ直ぐに見据えてくる深雪の気迫に結局何も言えなくなり、極まり悪^きそうに顔を背けた。

再び沈黙が訪れる。

やがて、リエがすすり泣きを始めた。深雪も両手で涙を拭っている。

「ごめん・・・なさい」

ぼつりとそれだけ呟くと、律子は再び腰を下ろした。

「とにかく今は、憶測でモノを言っても余計に疑心暗鬼になるだけです。冷静になって、全員で固まって夜を明かしましょう。犯人探しはそれからだ」

小五郎が立ち上がったって力強く言うのと、全員が黙って頷いた。

蘭に肩を抱かれていた深雪も、ようやく泣き止んだようだった。

落ち着きを取り戻しつつある室内で、コナンはというと、同級生たちを見回しながら考えにふけていた。

——おっちゃんの言う通りだ。さっき見回ったら別荘内に侵入者らしき奴はいなかったし・・・。このまま全員で身を寄せ合ってれば、とりあえず朝には助かる。だけど・・・

コナンには、どうしても外部の侵入者による犯行だという点が腑に落ちなかった。どう考えても無理があるのだ。

夕食が終わってから、蘭と深雪がキッチンで洗い物を始めるまで、全員がバラバラの行動をしていた時間が数十分あった。

そのあとに蘭と深雪がキッチンに入り、彼女らとほぼ同時に小五郎

とコナンはリビングに戻り、少ししてそれにリエと岡林が加わり、リビングで写真を見ていたところ、要が律子を探しに来て、直後に要は遺体で発見された、という流れである。

その問題の数十分の間には、テーブルの上を片付けていた者、風呂を沸かしていた者、着替えなどで一旦自室へ戻った者、暖炉まきの薪の在庫を確認しに行った者など様々で、今となっては誰がどのような行動していたか正確に確認するのは不可能だ。

キッチンにはリビングを突っ切らなければ入れないため、全員がずっとリビングにいた夕食中にキッチンから凶器となった包丁が盗まれたという可能性は恐らくない。

となると、盗まれたのは夕食が終わって一旦自由行動になり、蘭と深雪が再び洗い物を始めるまでのその数十分間だと考えられた。

だが、そこまでの推理はほぼ間違いなさそうなのであるが、そうすると外部犯の犯行だと考えるのは不自然すぎた。

つまりその外部犯は一同が別荘内でバラバラに行動している数十分の間に2階の廊下の出窓から侵入し、まず階下へ降りてキッチンへ行き、包丁を盗んでから要の部屋へ戻って彼女を殺害し、再び出窓から外へ逃げたことになる。

その一連の行動を、別荘内の誰にも見つからずに行えるとは、どうしても思えなかった。

また、侵入者が京香だったという説も、突拍子もない話である。

6年間も行方不明で、生死さえわからなかった昔の同級生が、いきなり同窓会に現れて窓から侵入して殺人を犯すなど、強引すぎる考えだ。

——ひょっとすると犯人がこの中にいて、何としても犯行を京香さんの仕業に見せかけたくて演出してるのかもしれない。とす

ると、さっきから京香さんの犯行を強調してる律子さんやリエさんが怪しい・・・

だが、京香が犯人だったとしても違ったとしても、彼女の失踪と共になくなっていたはずのピアスが現場に落ちていたのだから、少なくとも京香に関して何らかの意味があるということは確かだった。

コナンは静寂の中、思いつめた表情で黙りこんでいる同級生たちを用心深く見回した。

誰も何も言葉を発しないまま、時間だけが過ぎていった。外の吹雪も、ピークよりは収まってきているようだった。真横に吹きすさんでいた暴風が、少し弱くなっている。

天候の回復の兆しが見えてきたことで、恐怖と苛立ちで張り詰めていた一同の空気も和らいできた。

緊張の糸が途切れると、今度は眠気を我慢するのが辛くなってくる。コナンもその一人だった。

——だめだ・・・睡魔で頭が回らねえ・・・

コナンは頭を振ると、蘭に小声で「ちよっとトイレ行ってくるね」と言っただけで席を立った。

「え、ちよっと・・・気をつけてね？」

心配そうに声を掛ける蘭に「大丈夫、大丈夫」と返し、足早にリビングを出る。

吹き抜けの玄関ホールは寒々としていた。

やはり頭をハッキリさせるには寒い場所に限る。

ついでに彼は、例の木の下の足跡をもう一度確認しておこうと靴を履いた。

収まってきているとはいっても、吹雪は吹雪だ。外は強烈に寒い。コナンはぶるっと身震いすると、足早にモミの木へ向かった。

——やっぱさっきの俺とおっちゃんの足跡は消えちまつてるな・
・こっちの足跡は・・

木の根元に残っていた足跡も、だいぶ薄くなってきた。
この吹雪では仕方ないのだろうが。

——犯人が内部の同級生の誰かだったとしても、この足跡の説明がつかないんだよな。外部犯に見せかけるためだからって、どこをどう歩いたか、痕跡として残りやすい足跡まで偽造するなんて危険すぎる。まあ本当に外部犯だったなら別だけど・・・。

そんなことを考えながら一つ一つの足跡に目を向けていた、そのときだった。不自然な痕跡を見つけたのは。

——あれ？なんでここ、土と雪が混ざってんだ？

さっきは気がつかなかったが、足跡のある傍の、木の根元に沿った部分の雪が乱れていた。

掘り返され、その雪に土が少し混じっている。穴を掘って埋め戻したような跡だった。

——何か埋まってるのか!?

冷たい雪の中に手を突っ込むコナン。

案の定、土は柔らかく解れていて、誰かが一度掘り返したのは明らかだった。

すぐに、異物に手が触れる。小さなそれを掴んで土の中から引っ張り出してみて、コナンは驚愕した。

——な、なんでコレが木の下に埋まってるんだ!?

予想外のモノの出現に、目を見開く。

土と雪にまみれてコナンの手の中にあるのは、花とガラスの飾りのついた、片方だけのピアスだった。

そう、要の殺害現場にも落ちていた、深雪の姉・京香がつけていたピアスのもう片方と思われるものである。

——そんな・・・一体、誰が埋めたんだ!?!?そもそも何のために!?

そのときコナンの頭に、先ほどのリビングでのとある人物の動作が思い起こされた。

「そういえばあの人、さっき・・・」

思わず声に出してみて、その閃きは確信へと変わった。

「なんか、すごい冷えるんだけど」

「つーか、眠ねみイよ・・・」

コナンが外からリビングへ戻ってくると、一同は痺れを切らして口々に何か言っていた。

あまりに長時間じっと座っているので、疲労や眠気で落ち着きが無くなってきたのだ。

吹雪は弱まりつつあるものの、まだ夜明けには程遠い。

「あ、じゃあ食後に飲むはずだったコーヒー、また淹れてきましたよ
うか？ 目も覚めるし、温まるし・・・」

蘭が氣を利かせて言うと、小五郎も賛同した。

「そうだな。よし、俺もついてってやるよ」

2人が席を立ててキッチンへ向かう。

それを見届けると、岡林が両腕で自分の体を抱きながら、暖炉に近寄った。

「でも確かに寒いな。暖炉の火も弱いし・・・もう薪まきが少ねーんじやねえか？」

すると、結城も立ち上がった。

「じゃあ俺、外の小屋から何本か持って来るよ」

「ああ、いいって、いいって。俺行くよ」

しかし岡林は手を振って結城を遮ると、リビングを出て行こうとする。

「ちょっと、一人で大丈夫!？」

律子が彼の背中に声を掛けるも、岡林は軽い調子で返事を返した。

「大丈夫だって。さっき別荘内に不審者がいないのは確かめたし、犯人もこの吹雪じゃとつくにどっか逃げてるよ」

「そ、そうだけど・・・」

なおも律子是不安そうな顔で室内を見回している。

そうこうしているうちに、岡林はさっさとリビングから出て行ってしまった。

ドアの向こうから「うー、さびィ・・・」という声が聞こえたのを最後に、リビングは再び静かになる。

合間合間に、暖炉の火が爆ぜるパチパチという音が響くだけだ。

コナンは、一人で出て行く岡林を、特に止めなかった。彼の言った通りだったからである。

もし要殺害が外部犯の犯行だったとすれば、その何者かが別荘に潜んでいないのは確認済みで、しかも外は吹雪。

別荘から逃亡したのならば、近くに何の建物もないこの辺りに潜伏するのは不可能である。

もちろんコナンは、同級生の誰かの犯行だという考えのほうを色濃

く疑っているが、もし内部犯の場合でも、要が殺害されたときアリのバイの無い容疑者候補の律子・結城・駿の3人さえ見張っていれば、他のメンバーが数分間ほどバラバラに行動しても危険はないと考えていた。

「確かに、別荘内にいれば安全よね。戸締りもしてあるし……私もちよっとトイレ行ってくるわ」

「じゃあ私も、寒いので部屋に戻って上着とか手袋取ってきます、蘭さんの分も」

しばらくして、リエと深雪も部屋を出て行った。

幸い、問題の3人——律子・結城・駿——は移動する気配はなかった。

相変わらず律子と駿はイライラと目を泳がせているし、結城は腕を組んで座って、じっと目を閉じている。

——誰だ？この3人のうち……誰が要さんを殺害したんだ……？

コナンは目の前に座る3人を凝視しながら、先ほど木の下で見つけた片方だけのピアスをポケットの布ごしに、ぎゅっと握りしめた。

「ねえ……ホントに深雪さんのお姉さんが犯人なのかなあ……」

律子の悲鳴から始まった騒ぎで、出しっぱなしで放置してあった人

数分のコーヒーカップを再び並べながら、蘭は父親に尋ねた。

「まあ、深雪さんには可哀そうだが、その可能性が高いだろうな」

小五郎が蘭の背中に返事をする。

彼は蘭がコーヒーを準備する後ろで壁に背を凭^{もた}せ掛けながら、タバコに火を点けた。

「京香さんが要さんを殺したなんて・・・」

蘭が、並べたカップのうち要が使うはずだった一つを脇へどけて、深い溜め息をつく。

「それとたぶん、この間殺された摂田智也とかいう野郎の事件も、恐らく京香さんだろうな・・・」

「そんな・・・！2人も殺したっていうの！？」

蘭は声を荒げて小五郎を振り返った。

しかし小五郎は壁にもたれたまま堅く目を閉じている。

「信じたくなくても、それが『真実』だなんてこと、今の世の中いくらでもあるんだ。信じたくない真実、それが『現実』だよ」

何かを悟っているような、諦めているような小五郎の重い言葉に、蘭は何も言えずに視線を落とした。

この部屋で蘭に弱音を吐いた深雪。生死もわからずただ待っているだけでも相当追い詰められていたのに、その相手が今度は殺人の疑いをかけられているなんて、彼女は今どれほど辛い思いをしている

のだろう。

無理をして気丈に振舞っている深雪を思うと、蘭は胸が詰まった。

——ねえ、新一・・・新一なら、深雪さんを救ってあげることができるのかな・・・

姉の疑いが晴れて、深雪が彼女と無事に再会できれば、新一も帰ってきてくれるような気がした。

コーヒーの沸く音を聞きながら、蘭は窓の外の吹雪をぼんやりと見つめた。

小五郎が要の分の余ったカップにタバコを押し付けて火を消す音が、妙に遠くに聞こえた。

数分後、リエがトイレから戻り、やがて深雪も自分の分と、同室の蘭の分の防寒着を持って戻ってきた。

蘭と小五郎がトレイに乗せたホットコーヒーを運んできて、その場の全員が手に取る。

みんな思い思いにミルクや砂糖を入れて、熱いコーヒーをすすった。コナンもブラックで飲んで頭をハッキリさせながら、油断なく同級生たちを観察する。

そのとき駿が、湯気で曇ったメガネ越しにトレイを見て、不思議そうな顔をした。

「あれ？コーヒー、一つ余ってるな・・・要の分か？」

すると蘭が、すぐさま首を横に振る。

「いえ、要さんの分は数に入れずに人数分だけ淹れたので、余るはずはないんですけど……」

「え？じゃあ……」

そのとき、室内を注意深く見回していたコナンがすぐに違和感に気付いた。

「ねえ！岡林さんが戻ってきてないよ！！」

一瞬で、その場の空気が凍りつく。

「ひょっとして……外に薪を取りに行ったまま帰ってきてない！？」

「おい、いくらなんでも遅いよな！？」

「やだ、そんな……まさか……」

とたんにリビングはパニックになった。

一同の脳裏に嫌な予感と、かつての同級生——京香の面影が浮かぶ。

再び襲ってきた恐怖と不安に、深雪は真っ青になってガタガタ震え始めた。

その場の騒ぎを収めるように、小五郎が冷静に呼び掛ける。

「とにかく様子を見に行ってみましょう！ただし、危険があるかもしれないから男性陣が先頭に立って誘導します。女性陣はなるべく固まって、私たちが戻って来るまで絶対に玄関から出てこないで下さい！」

小五郎の言葉を合図に、全員が立ち上がる。

だが深雪は、震えたまま足がすくんで動けないでいた。それに気付いた結城が、そっと深雪の肩を抱く。

「大丈夫？」

深雪の見開かれた両目に、みるみる涙が盛り上がった。上手く言葉が出ない。

「無理なくていいから。大丈夫だよ、落ち着いて」

彼の優しい言葉に、ようやく深雪はか細い涙声で呟いた。

「私、頭が混乱してて・・・怖い・・・！」

声に嗚咽おえつが混じる。涙が頬を伝った。

「お姉ちゃん・・・」

不安に押し潰されそうになりながら、深雪は結城に支えられてリビングを出た。

一同は固まって、しんと冷えた玄関ホールから出入り口へと急ぐ。

寒さに関わらず、コナンの額には冷や汗が浮かんでいた。
ホールの不気味なほどの静けさが、余計に彼を急^せきたてる。

——頼む、頼む！無事であってくれ！！

コナンは先陣をきってドアを開けた。

びゅうっと冷たい風が吹き込み、雪が視界を邪魔する。

足元を見ると、さっき出て行った岡林のものと思われる足跡がうっすらと残っていた。

それは玄関先から向かって右に曲がり、建物の角の向こうに消えている。薪の置いてある小屋の方向だった。

「岡林さん！」

「佑介えー！無事かー！？」

モミの木とは反対方向、別荘の外壁に隣接するように建てられているその小屋へと、コナンを先頭に、男性陣は走った。

必死に呼びかける声に、しかし返事はなかった。

「・・・・・・・・！！」

次の瞬間、誰もが言葉を失って立ち止まる。

息が止まった。

小屋のドアの前に、薪が何本も散らばっている。
そのさらに手前、深い雪の中、こちらに頭を向けて、岡林がうつぶ

せに転がっていた。

背中には垂直に、『何か』が突き刺さっているのがわかる。雪の上に転々と落ちている真っ赤な血だけが、吹雪で真っ白な世界の中で、やけに色鮮やかだった。

「そんな・・・佑介まで・・・殺されるなんて・・・」

力無い結城の声がした。

駿は茫然と立ちすくんでいる。

小五郎がようやく我に返って倒れている岡林に駆け寄り、すがるような目で首筋に手を当てたが、やがて無念の表情でがっくりと下を向いた。

——くそっ・・・くそおおおお！

コナンは声にならない叫びに顔を歪め、真っ白な雪に力いっぱい拳を打ち込んだ。

その冷たささえも感じないほど、彼は第二の殺人を阻止できなかった悔しさに苛こまれていた。

「このナイフ、小屋にあったヤツだよな・・・？」

駿が震えながら岡林の遺体に近寄って言う。

彼の背中に突き刺さっているのは、小型のナイフのようだった。

「ああ。夕食前に薪を準備したとき、確かに工具箱に入ってたよな」

結城の返事を聞き、小五郎も遺体を覗き込んだ。

「工具箱に入ってたってことは、アウトドア用のナイフってことっすか？」

「ええ。たぶん拾った木材の小枝を切り落したり、長さを整えたりするための、工具の類たぐいだと思います」

結城は医者という職業柄なのか、割と早く冷静さを取り戻し、小五郎が現場の状況を確認するのを手伝い始めた。

一方の駿は、遺体に近寄った方がいいが、とたんに真っ青になってその場にへたり込んでしまった。

「しまったなあ・・・別荘内に犯人が隠れてないか見回ったとき、この外の小屋まではノーマークだったぜ。きつとずっと小屋に潜んでたんだな。で、岡林さんが薪を取りに入ってきて、工具箱の中にあつたナイフで彼を刺して逃げた、と」

「うかつでしたね・・・あの、毛利さん、その・・・やっぱり京香なんでしょうか？」

「・・・そうは思いたくありませんが・・・」

コナンはそんな小五郎と結城の会話を聞きながら、まだ憤りの収まらないまま厳しい表情で現場を眺めた。

「——いや、違う・・・。要さんが殺された凶器はキッチンの包丁、岡林さんが殺されたのは小屋にあつたナイフ。凶器が両方ともこの別荘に最初からあつたものだ。外部犯なんかじゃない。これは内部犯の犯行だ！」

コナンは要殺害のときにアリバイがない3人を思い浮かべた。
今ここにいる結城に駿、それと挙動が不自然な律子。

——誰だ？3人の中で岡林さんを殺せたのは・・・

だがしかし、岡林が薪を取ってくると言ってリビングを出ていつてからのことを思い出していた彼は、揺るぎない事実気付いてしまった。

——いない・・・！

体に冷たいものが突き抜けたような感覚に襲われる。

——第一の殺人でアリバイがない3人の中で、岡林さんを殺せた人はいない！

岡林がリビングを出てから、コナンは容疑者候補のその3人を見張っていた。

遺体を発見するまで誰一人、その場を離れた人間はいなかった。
要を殺せた人物で、かつ、状況的に岡林も殺せた人物は、誰一人存在しないのだ。

凍えそうなほど寒いはずなのに、頬を冷や汗が伝う。

——そんな・・・これは、不可能犯罪だ！それとも、本当に外部犯・・・京香さんが犯人だっていうのか！？

衝撃的な事実、コナンは頭の中が目の前の雪景色に重なって、真っ白に覆われていくのを感じていた。

「そんな・・・そんなぁ！岡林君まで・・・」

リエの悲鳴のような声が、玄関ホールにこだました。

男性陣が待機させていた女性陣のもとに岡林の死を知らせに戻ると、彼女たちは真っ青になって表情を凍りつかせた。

深雪は蘭と共に白い両手を握り合わせてガタガタ震え、言葉を失った。リエは対照的に、さかんに何か言いながら泣き叫んでいる。

そのとき、今まで黙って立ち尽くしていた律子が、いきなり大声を上げた。

「いやあああああああ！！」

両腕で頭を抱え、その場に崩れるようにしゃがみ込む。

「り、律子・・・」

駿が彼女の肩に手を掛けようとすると、律子はその手を乱暴に払いのけた。

「触らないで！！」

「おい、大丈夫かよ・・・」

「近寄らないでえ！！」

律子はふらつく足取りで立ち上がって人の輪から離れると、再び座り込んで頭を抱えた。

ぎゅっと目をつぶり、半狂乱になってわめき散らしている。

予想外の律子の反応に、一同は茫然と彼女の姿を見つめた。

もともと大人しくて気の弱そうなりエでさえあれほどまでに取り乱してはいないのに、ハキハキとして逞たくましい律子が、手がつけられないほどのパニックに陥っている。

明らかに異常な行動だった。

——あれはただこの状況を怖がっているだけじゃない……。何か決定的なモノの存在に追い詰められ、怯えているように見える……。。

コナンはまた一つ、律子の行動に不可解なものを感じた。

完全に怯えきっている女性陣と、同じく怯えて使い物にならない駿を暖かいリビングに待機させると、コナンと小五郎、それに医者である結城の3人で、再び岡林のもとへ向かった。

明け方にはまだまだ遠いが、吹雪は弱まっている。屋外でも何とか周りを見回せるほどになっていた。

「どうですか？ 結城さん。死因はわかりそうですかね？」

「僕もまだ研修医の身だし、検死が専門なわけでもないので言い切

ることはできませんが・・・心臓を刺されたことによる失血死だと思います。他に外傷ありませんし」

岡林の体を調べていた結城が、顔を上げて答える。

「やっぱりそうっすか・・・要さんを殺したのと同じですな」

小五郎も遺体の側に屈かがみこんで、突き立てられたナイフを眺めた。

2人が遺体を調べている間、コナンは小屋の周りの状況を見て回っていた。

——ちくしょう、うかつだったな・・・。岡林さんを探すことに気を取られていたせいで、足跡が混ざっちまった。

岡林が戻ってきていないことに気付き、無事を確認するために小屋に向かって一目散に駆け付けたため、殺害現場の周囲の雪には男性陣の足跡が入り乱れてかなり雑多な状態になってしまっていた。

玄関を出るとき、岡林のものと思われる一組の足跡が小屋まで続いているのは確認したが、もはやそれも見分けがつかなくなっている。肝心の犯人の足跡も確認できなかった。

だが唯一、ただ二組の足跡だけが綺麗に残っているルートがあった。岡林が倒れている場所から、小屋の入口までの数メートルである。恐らく岡林が小屋に入ったときの足跡と、小屋を出て雪の中に倒れたときの足跡である。

その二組の足跡の周りには血が転々と落ち、新しい薪まきが乱雑に散らばっていた。

——・・・ん？待てよ？おかしいぞ、この状況・・・

コナンは足跡に沿って小屋の前まで行き、半開きになっていたドアから中へ足を踏み入れた。

木材の匂いが鼻をつく。

裸電球の明かりの元、割られた薪や丸太、材木などが整然と積まれている。入口の脇に取り付けられている棚には、薪を割る斧や、ノコギリ、スコップなどと一緒に、深緑色の工具箱が、蓋の開いた状態で置かれていた。

そしてコンクリートの床には、少量の血だまり。

——やっぱり・・・。岡林さんは、小屋の中で刺されたんだ。なのにその後、どうしてあそこまで歩いて行ってるんだ！？

雪の上に、引きずられたような跡はない。つまり彼は、小屋の中で刺されてから自力で外に出て雪の上で力尽きたのだ。

心臓を一突きにされて、即死でもおかしくない状況。だがなぜ彼は、そんな瀕死の状態で、わざわざ小屋の外へ出たのだろうか。

——助けを求めて、別荘まで戻ろうとしたのか？

違和感が、コナンの脳裏に引っ掛かったままなかなか消えてくれなかった。

コナンたちがリビングへ戻ると、まだ律子は激しく取り乱していた。他の者がなだめたり声を掛けたりしても全く聞き入れず、部屋の隅

にうずくまり、耳を塞いでガタガタ震えている。

「律子さん、そんなところにいないで、こっちに来て暖炉の火に・・」

「うるさい！誰も私に近寄らないで！！」

心配した小五郎の言葉も、律子は叫ぶようにはねつけた。ムツとしたように声を荒げる小五郎。

「あんたねえ！」

「まあまあ、毛利さんも落ち着いて」

結城が、待機していたメンバーを安心させるように呼び掛ける。

「現場の状況を見てきたけど、誰か潜んでいる気配はなかったよ。じきに夜が明ける。それまで今度こそ、みんなでリビングに固まっていたよう」

「そうね。絶対に外には出ないようにして、用があるときは必ず何人かで行動するようにして・・」

「そうするしかないな。吹雪が収まって、通報さえ出来れば助かるんだ」

不安そうな表情のまま、何人かが頷く。だが、律子だけは違った。さっきまで喚き散らしていたはずが、急に静かな口調になって、キツと一同を睨みつけた。

「ふん……。あんたたち、本気で京香が犯人だと思ってるの？」

「……え？ 律子？」

「京香のはずないわ！ このままだと、私たち全員殺される！！」

——何だって！？

コナンの中にあつた形にならない律子への疑念が、おぼろげな輪郭を描き始めた。

彼女の不自然な証言、何かを隠しているような行動、この状況への異様な恐怖……。

要殺害が起こってから律子の一連の不可解な様子が、コナンに一つの推論をもたらした。

——まさか……。もしかしてこの人、京香さんのこと……

信じられないが、あり得ない話ではなかった。

それに、その推理の通りだとすれば、今回の事件にも説明がつく。

——だとすれば、要さんや岡林さんも関係してたってことか？ それが殺された動機だとしたら……。そう考えると、あの木の下のアスって……

コナンは別荘に着いてから、ピラスという手掛かりが浮上してきた経緯を思い出してみた。

木の下に埋まっているのを発見し、その前に、要の殺害現場に片方だけ落ちていて……

そこまで思い出して、ハッとするコナン。

そもそもピアスの話題が初めて出たのは、夕食の時、同級生たちのサークル活動の写真の中で、ピアスを付けた京香が写っているのを見つけたときだった。

——そうだ・・・ピアスの話題になったとき、確か要さんが、不自然な反応をしたんだ！

同級生たちが写真を見て、京香のピアスを覚えていると話していたとき、急に話を振られた要がギリリとして言葉を濁した瞬間を、コナンは覚えていた。

——じゃあ、あの木の下足跡はもしかして・・・！

繋がり始めた手掛かりが一つの推理に結びつき、コナンはだつと駆け出した。

「あ、ちょっと、コナンくん！みんなと離れちゃダメだって！！」

すでにリビングのドアをはじき開けていたコナンには、蘭の慌てた声はもはや届いていなかった。

「つたく、外に出たら危ねえつつつたそばからあのガキ！」

小五郎が舌打ちして、彼の後を追う。

その背中を、唇を固く引き結んだ律子が鋭く見つめていた。

——やっぱり！

階段を駆け上がり、今は板で塞がれている出窓の前に立ったコナンはその状況を見て、自分の推理が正しかったことを確信した。

「くおら！勝手に行動したら危ねえつつってんだろ！！」

「うああっ」

しかし、遅れて到着した小五郎にいきなり首根っこを掴まれて、宙ぶらりんになった。

必死で手足をバタつかせて訴える。

「待ってよ、おじさん！おかしいよ、この状況！」

「なーにが『おかしいよ』だ、クソガキ！どうせ、そうやって何かにつけてウロチョロしたいだけだろうが」

「違うって！本当に変なんだよー！ほら、この窓ー！」

「ああん？」

「出窓だってばあ！花瓶！かーびーんー！！」

「花瓶だあ？別に何もおかしくねえじゃねーか」

「だからそれが変なんだってば！」

「何わけわかんねえこと言ってるんだよ」

「もうー！降ろしてー！！」

小五郎にこの証拠を気付かせるまで、コナンはずっとぶら下がったままだった。

なんとか状況の不自然さを重要な手掛かりとして小五郎に気付かせ、解放されたコナンは、しかし結局リビングへ連れ戻されることになった。

その道すがら、ぼんやりと浮かび上がってきた犯人像に考えを巡らせる。

——となると、犯人はあの人か？・・・いや、でもあの人には要さん殺害と岡林さん殺害、この二つの殺人を両立させることは不可能だ。

糸口を見つけたと思っても、『不可能犯罪』という壁にぶつかる。どうしても、要と岡林の両方を殺したトリックの説明がつかなかった。

それにコナンの頭に引っ掛かっているのは今回のその2つの殺人の他に、もう一つ。

先日、何者かに殺されたもう一人の同級生で、京香の恋人だったと思われる摂田智也の件である。

——全く関係のない事件なのか、もしくは今回と同じ犯人が彼を殺したのか……。どっちにしても、目暮警部の話だと摂田智也さん殺害の事件はまだ解決されてないんだよな。

深雪が小五郎を訪ねてくる数日前、目暮警部は小五郎に助言を求めにやってきていた。

今のところ、全くと言って良いほど手掛かりや証拠が発見されていないらしい。

胸部に果物ナイフを突き立てられた被害者が倒れていただけで、凶器はおろか室内のどこからも犯人に繋がる指紋は検出されず、はっきりした足跡や有力な目撃証言なども得られていない状況で、捜査が行き詰まっているのだと言って頭を抱えていた。

——指紋といえば、要さんや岡林さんを殺した凶器から指紋でも出れば一発なんだけどなあ・・・。この状況下ではそれを確かめる術はないけど、まあでもたぶん期待はできないだろうな。

巧妙に二つの殺人を成功させた犯人が、凶器に指紋を残すような初步的なミスを犯すとは思えなかった。

——でも岡林さんを殺したナイフには、柄の部分に少量だが血痕がこすれた痕があった。もし犯人が指紋を残さないよう手袋なりハンカチなりを使ったとしても、そこには岡林さんの血痕が付着しているはずだ！

コナンは彼の遺体に刺さったナイフの状況を思い起こした。

傷口から伝ったと思われる血でナイフの柄は濡れ、それが若干乱れていたのだ。柄を触った時にこすれたものだと考えられた。

犯人の手に、岡林の血痕が付着したのはほぼ間違いない。

リビングに集まっているメンバーの中には、そのような痕跡のある人物は見当たらなかったが、もし血痕の付着しているものを所持し

ていれば、重要な証拠となる。

——吹雪が止んで警察が到着してから全員の身体検査をすれば、きつとその証拠は出てくる。どんなトリックを使ったかは知らねえが、捕まるのも時間の問題だぜ……！

まだ見ぬ犯人に向かって、コナンは心の中で挑戦するような言葉を投げかける。

「もうほとんど吹雪も止んできたな」

階段を降りながら、窓の外を眺めていた小五郎が、ぼそりと呟いた。何かを予感させるその言葉が、吹き抜けの空間に静かに響いて消えた。

「毛利さん！電話が繋がりましたよ！！」

コナンと小五郎が階段を下りると、玄関ホールの固定電話の前で、受話器を持った駿が興奮した様子で声を掛けてきた。

「本当ですか！」

「はい！吹雪が収まってきたので試しに掛けてみたら、掛かったんですよ！今、110番に繋がってます」

「では私の知り合いの警部殿に来てもらえるよう話を通してみます！」

小五郎は駿から受話器を受け取ると、事情を説明し始めた。

真夜中を過ぎた深夜だったが、目暮警部は摂田智也殺害事件の捜査でずっと警視庁に詰めていたらしく、すぐに本人に繋いでもらえた。

『おお、毛利君！どうしたんだね？こんな時間に。どこから掛けるんだ？』

「警部殿おー！実はちょっと事件に巻き込まれてまして・・・」

『またかね！全く君は、出歩くたびにその様さまじゃないか！「毛利も歩けば事件に当たる」だな』

「いやそんな上手いこと言ってる場合じゃなくてですね！」

コナンは受話器から漏れ聞こえてくる目暮警部の声に耳をそばだてる。

小五郎は自分たちが殺人事件に巻き込まれたこと、吹雪で身動きが取れないこと、6年前に失踪した京香が関係していること、そして摂田智也殺害事件とも関係があるかもしれないことを順に説明していった。

話を聞き終えた目暮警部は、真剣な口調になって言葉を返してきた。

『わかった。すぐに部下と共にそっちに向かう。もう雪も止み始めているから、足止めはくらわないはずだ』

「ありがとうございます、警部殿」

そのとき、目暮警部が電話口で思い出したように言った。

『そうだ、毛利君。摂田智也さんの事件、わずかだが進展があつてな。手掛かりになりそうな物が出てきたぞ』

——何だって!?

「な、なんですって!?!でも警部殿、この間は手掛かりが全く見つかってないって・・・」

警部の言葉に、コナンも驚く。その手掛かりによつては、コナンの推理の真偽にも関わってくる。

警部はあくまで冷静に話を続けた。

『そうだったんだが、摂田さんの胸部に刺さっていた凶器の果物ナイフに、少量の繊維が付着しているのが発見されてな。ナイフの刃と柄のつなぎ目の金具の部分に、灰色の繊維が挟まっていたんだよ』

——灰色の、繊維・・・？

コナンの思考を、何かの記憶がくすぐる。

『鑑識で彼の衣類や日用品を全て調べた結果、彼の持ち物の中に、その繊維と一致するものはなかった。つまりその繊維は、犯人が摂田さんを刺したときに身に着けていた「何か」からナイフに付着したものだ』

「はぁ・・・そうですか。それで、その犯人の目星はついたんスカ？」

『いや、これからその新たな証拠をもとに容疑者を洗い直すところだ。まあとりあえず、わしは今からそっちに向かうからそのまま待機しておれよ！』

「は、はい！よろしくお願いします、警部殿！」

受話器を置いたあと小五郎は、信頼している目暮警部が来てくれることに安心しきったようで、特に何も疑問を持たずにそそくさとりビングへ戻って行った。

その後を追いながら、コナンはというと、新たに浮上した『繊維』という謎に、何故か無性に思考を乱されていた。

神経をすり減らしてリビングで待っていた他のメンバーは、もうしばらくで警察が到着すると聞いて、わっと安堵の声を上げた。

「もうほとんど吹雪も収まっているので、恐らく明け方には到着するでしょう。あと1、2時間の辛抱です。皆さん、がんばりましょう！」

小五郎が声を掛けると、リエや蘭、深雪は緊張が解けたようで、目に涙を浮かべた。

だがやはり、女性陣の中で唯一、律子だけは表情を緩めなかつた。

それから律子は黙りこくり、一切言葉を発しなかつた。

一方、恐怖から解放された他のメンバーは落ち着きを取り戻し、飲みかけだったコーヒーに口を付けたり、励まし合う言葉を交わしたりしながら、穏やかな空気で時が過ぎるのを待った。

まだ姉の京香の嫌疑が晴れていない状況ではあるが、深雪も比較的に落ち着いてソファに座っている。

隣に座る結城が、複雑な表情の深雪に時折声を掛けて気遣っていた。

この同窓会の中で、結城は深雪の精神面での大きな支えとなっているようだった。

別荘に到着してから緊張の糸を張り通しだった深雪だが、事件の後で結城と接していくうちに、次第に心を許していったのだろう。もうすぐ助けが来るというこの状況の中で、2人は安堵感からか一際打ち解け合っているように見えた。

だがそんな空気の中、コナンは律子同様に口をつぐみ、考え事にふけていた。

——摂田智也さんの事件の凶器に付着していた繊維……。岡林さんが殺されたナイフの、血のこすれた跡……。それと、要さんが殺されたときの凶器はどうだったわけ？……。だめだ、血溜まりの中に落ちてたから手掛かりは見つけられそうにないな……。あれ？

3つの殺人現場を思い出していたとき、ふと素朴な疑問に行き当たる。

——そういえば、何で要さんのときだけ凶器が遺体から引き抜かれてたんだ？

摂田智也の殺害事件でも、岡林の殺害のときでも、凶器は遺体に刺さったままだった。

なのに要の場合は刺された凶器が遺体から引き抜かれ、床に落ちていたのである。

人間の急所に刃物を刺すと、そのままでも当然出血して、場合によっては死に至る。だが刺した刃物を引き抜いた場合は、傷口から血液が大量にあふれ出す。

摂田や岡林の場合は心臓部を一突きにされて、刃物が刺さったまま死亡したため比較的少量の出血だったが、要は凶器を引き抜かれていたため大量に出血しており、現場は血の海だったのである。

——この違いは、一体何なんだ？殺害するとき、たまたまそうなのただけなのか？それとも、要さんだけそうやって殺さなければならぬ理由があったとか……？

凶器をめぐるその疑問がコナンの頭を支配し、ああでもない、こうでもないときどき巡りの思考を繰り返すうち、時は刻一刻と過ぎてい

った。

やがて時間が過ぎ、窓の外では雪が完全に止んでいた。

東の空がうつすらと明るくなりつつあり、夜明けが近いことを感じさせている。

コナンは未だ、出口の見えない謎に考えを巡らせたままである。

警察が到着して捜査をすれば解決するかもしれないが、捜査で明らかになるであろう証拠うんぬんの問題ではなく、腑に落ちない点がいくつもあった。

先ほどの殺害方法の違いの問題や、岡林が刺されて瀕死の状態でもなお小屋の外へ出た理由などである。

——小屋の中で刺されたはずなのに、自分の足で外へ出て、力尽きて吹雪の中に倒れていた岡林さん……ただ助けを呼びたかったのか、それとも……何かのメッセージだったのか？

コナンの脳裏に、岡林の殺害現場の情景が甦る。

物言わぬ岡林の遺体が、深い雪に埋もれながら、必死に何かを訴えているような気がしてならなかった。

——だとしても、一体何を伝えたかったんだ？ただ雪の中に倒れてただけで……え？待てよ……まさか……

一瞬よぎった発想。その推理が、コナンの心にずっしりと重くのしかかった。

その重さに耐えられず、彼はすぐに頭を振る。

——いや、まさか。まさかな・・・そんなことあるわけ・・・

その時だった。

ブルルルルルルルル——

しんと冷えた空気の中に、突然電子音が響いた。

ビクツとして、ソファの背もたれから体を起こす一同。

やがてそれが玄関の電話の着信音だとわかると、小五郎が明るい声で言った。

「おっ！警部殿か？」

「僕、出るよ」

出入口口に一番近いところに座っていたコナンが、ぴよんとソファから飛び降りる。

先ほどの重い不安を振り払うように、足早にリビングを出て玄関ホールへ向かった。

「はい、もしもし」

『おお、コナン君かい？』

「目暮警部！」

察しの通り、電話の相手は目暮警部だった。

今パトカーで山道に差し掛かったところで、あと数十分で別荘に到着する、とのことだった。

『そろそろわしの携帯も圏外になりそうなんだな。今のうちに知らせておきたいことがあるんだが、毛利君に伝えてもらえるかい?』

「うん! なぁに?」

『実は今、ある女性に同行してもらってそっちに向かっとなるんだ。連絡を取ってみたら繋がったんでね』

「ある女性?」

『ああ。まあそれは後で説明しよう。それよりも、もう一つ新しい情報なんだが――』

電話を切っても、コナンは心の底に渦巻く嫌な予感を抱えたままだった。

できれば真実であって欲しくない推測。しかし彼も小五郎同様、わかっていない。

信じたくない真実もある。それが『現実』なのだ。

リビングに戻ってある人物に目をやったとき、彼の推測は『現実』となった。

――やっぱり、そうなのか・・・

「おう、コナン。誰からだったんだ？」

「警部さん。今山道に入ったから、もうすぐ着くってさ」

「そうか。そんじゃまあ、いっちょやってやるか！」

「え、何を？」

いきなり立ち上がった小五郎に、蘭が不思議そうな顔を向ける。
彼は得意満面で声を張り上げた。

「決まってるだろ。名探偵・毛利小五郎の推理ショーだよ！」

「ええ!？」

突然の宣言に、全員が目を見開いた。

「警察が到着したらすぐに逮捕してもらるように、俺様が今から真犯人を暴いてやるのさ」

「ちょ、逮捕って・・・じゃあこの中に犯人がいるってことですか!？」

「その通り」

「だって犯人は京香なんじゃあ・・・」

「ええ、私も最初はそう思っていました。しかしまんまと騙されましたよ! さっきコナンに2階の出窓に連れて行かれたとき、現場の不自然さに気付かされたんです」

小五郎がコナンを振り返る。

彼は心の中で、小五郎に返事を返した。

———そうか、おっちゃん、やる気なのか。だったら俺も加勢するぜ。この悲しい事件を終わらせるためにな・・・

一同が固唾を飲んで見守る中、小五郎が話し始める。

「要さんの部屋の前の出窓は割られ、真横のモミの木の下には足跡が残っていました。この状況で我々は外部犯の犯行だと思い込んだのですが、改めて考えてみると不自然な点がいくつもあるんですよ」

「何ですか？不自然な点って・・・」

リエが問うと、小五郎は彼女のほうへ向き直った。

「綺麗すぎるんですよ、出窓の周辺が！割られたガラスの破片しか落ちていない。覚えていますか？コナンが出窓のカウンターに飛び乗ったときに花瓶が落ちそうになったのを」

それは要の遺体を発見した直後、現場を調べていたときのことであった。

コナンが外のモミの木の下を覗き込もうとカウンターに乗ったら、飾ってあった花瓶に引っ掛かり、倒しそうになったのだ。その時は、側にいた結城がとっさに花瓶を受け止めた。

「こんな小さな子供が乗っても花瓶に引っ掛かるほど、あのスペースは狭いんですよ。ましてや犯人が木から飛び移ったのなら、あんな不安定な花瓶を倒さずに侵入することなど不可能だ。それに、落

ちていてもおかしくない雪や、枝や葉も、あの出窓には全く落ちていなかった」

「つまり外部犯に見せかけるために、わざと外側から窓を割ったってこと？」

「そういうことだ、蘭。建物の中から、窓を片方だけ開けて腕を出し、閉まっているほうの窓ガラスを外側から中に向かって割るだけだ。難しいことじゃない」

蘭の付け足しで、全員が納得する。

コナンが小五郎に気付かせたかったことは、まさにそれだった。

「あとは木の下に足跡をつければ偽装工作が完了だ。問題は誰がそれをやったかだが、要さんの殺害時にアライの無い人物は3人でしたね」

急に鋭い口調になった小五郎に視線を向けられ、律子、駿、結城の3人はビクツと体をすくめた。

「ちょっと待ってよ！アライが無いだけで疑われちゃかなわないわよ！」

「そうですよ、毛利さん！そんなのただの推測じゃないですか」

「もっと確実な根拠を教えてくださいませんか？」

3人が口々に反論する。

だが小五郎はそんな彼らの反応も予想していたのか、表情を崩さずに続けた。

「もちろん推測の域を出ないのは確かです。しかし、あの出窓が割られていたのは『事実』です」

「・・・どういことですか？」

「あなた方3人は要さんの遺体を発見するまで部屋にいたと言っていた。ということは、だ。犯行が行われたまさにその瞬間も、ご自分の部屋にいらっしゃったということですよね？」

「そうに決まってるじゃない」

律子がイライラと答える。

他の2人は小五郎が何を言いたいのか予測できず、戸惑った表情を浮かべていた。

「外部犯が窓を割って侵入したとしても、あなた方の中の誰かがわざと窓を割ったとしても、どちらの場合にしても、窓は割られているんです。いくら部屋の中にいたからといって、廊下で窓が割れれば、一番近い部屋の人くらいは、その音に気付くでしょう」

噛み付かんばかりに小五郎を睨んでいた律子が、ふっと考える表情になる。

駿も何かに気付き、口を開きかけたが、言葉が見つからないようだった。

その意味深な沈黙の中、コナンの低い声が響いた。

「出窓があるのは2階の廊下の一番奥。その両脇に部屋があって、左側是要さんの部屋。その向かいの部屋の人は、どうして窓が割れ

る音に気付かなかったのかな？」

全員の視線が、ある人物に集中する。

小五郎もその人物の方へ首を回し、ゆっくりと口を開いた。

「しかもその人は、岡林さんが倒れているのを発見したとき真っ先に言いました。『そんな・・・佑介まで殺されるなんて』ってね。仮にも医者という立場にありながら、遺体に駆け寄って助けようとしなければ、生死を確認することもせず、最初から『死んでいる』と決めてかかった。その人は、岡林さんが死んでいることをあらかじめ知っていたんじゃないでしょうか？」

もう誰も、言葉を発する者はいなかった。

この瞬間、一同の頭の中には、2階の部屋の割り振りだけが浮かんでいる。

全員の考えを代弁するかのように、コナンは言った。

「律子さんの部屋は要さんの2つ隣。前川さんの部屋は要さんの斜め向かい。そして要さんの向かいで、出窓の右側の部屋の人は・・・」

その場の視線を一身に受けながら、その人物は無表情で立っていた。

小五郎が、真っ直ぐに指を差す。

「結城さん。あなたですよね？」

「そ．．．んな．．．結城さんが．．．？」

隣に腰を下ろしていた深雪が、驚愕の表情で彼を見上げながら、茫然と呟いた。

page 9. 凶器(前書き)

今回は後書きも本編の一部となります。

「大丈夫ですか？」

「ええ・・・」

別荘のある山の中腹。ここから先は除雪作業が追いついていないため、目暮警部たち警察一行はやむなくパトカーを降りた。幸い、コナンたちのいる別荘にはあと数分歩けば辿り着ける距離だったので、一同は厚く雪の積もる山道を自力で歩くことにした。

目暮警部が、同行してもらった女性を気遣って声を掛ける。

彼女はあまり体調が思わしくないようで、息が荒かった。

「無理しないで下さい。何ならパトカーの中で待ってて頂いても・・・」

「いいえ、行きます。行かなきゃならないんです。この事件を終わらせるために」

彼女の意志は固かった。

ふらつく体を奮い立たせ、雪の中を一步一步、何かに突き動かされているかのように進んでいく。

「私があの時・・・6年前のあの日、もっとしっかりしていれば・・・！」

じっと前方を見据えている瞳は揺るぎなかったが、その奥には哀し

みの色が溢れていた。

「結城・・・あんた・・・」

一瞬の沈黙のあと、律子は驚愕の表情で口を開いた。

小五郎に指を差されたままの結城は、何も答えない。

「嘘でしょ！？だってあんた、6年前のあの時には、京香とは何の関係もなかったじゃない！」

律子がまくしたてる。

傍らの深雪は、ショックを隠しきれない表情で言葉を失っていた。彼女にとって、この同窓会で最も信頼を寄せていた人物が犯人だったという事実、受け入れがたいものだろう。

律子の言葉には答えず、結城はようやく口を開いた。

「毛利さん、おっしゃりたいことはわかりました。確かに僕の一連の行動は不自然だったかもしれませんが、要が殺害されたときのアリバイありません」

小五郎が、指を指していた腕をようやく下ろす。

「ですがそれは全て『推測』でしょう？ 仮説の域を出ません。僕が犯人だという確固たる『証拠』を示して頂けませんか？」

静かに反論した結城に対し、小五郎は不敵な笑みを浮かべた。

「フツ・・・冷静ですね。あくまでシラを切り通すおつもりですか。まあ、ですがおっしゃる通り、現時点では証拠が不十分なのは否めません」

「ちよっとお父さん・・・証拠はないの！？」

驚いた蘭が、思わず父親を振り返った。

「心配するな、蘭。結城さん、あなたは思ったよりもしたたかな人のようだ。ですがこれから警察が到着して捜査が始まって、あなたはそうやって冷静でいられますか？」

「・・・どういことですか？」

「要さんの殺害現場は血の海でした。返り血を浴びていてもおかしくありません。その他にもあなたはキッチンから包丁を持ち出したリ、モミの木の下にわざと足跡を付けたリしている。あなたの持ち物や部屋をくまなく捜査すれば、いくらでもそういった痕跡は出てくると思いますよ」

そう言い切った小五郎に、今度は結城が笑う番だった。

「なるほど。いやでも証拠は出てくるというわけですか。では、どうぞ。調べて下さいよ。あの木の下足跡と、僕の靴が一致するかどうか」

それまで冷静だった彼の声に、急に自信の色が加わった。
余裕さえ感じさせるその言葉に、小五郎の瞳が揺らぐ。

「・・・え？」

「ちょうど吹雪も止んでますから、一つか二つくらいなら残ってるんじゃないですか？あの足跡。まあきつと一致しないでしょうけど・・・」

結城の笑みが深くなる。

その表情は、知的で颯爽とした雰囲気を持つ彼とは思えないほど、悪意に満ちていた。

そのあまりに余裕な態度に、小五郎は冷や汗を浮かべ、何も言えなくなってしまうた。

気まずい沈黙の中、それまで黙って小五郎の推理を聞いていたコナンが、静かに口を開いた。

「一致するわけないよ。だってあれ、結城さんの足跡じゃないもん」

「え!?!」

衝撃の発言を受けて、その場の全員が一斉にコナンを振り返った。

彼はポケットから、掘り返した片方だけのピースを取り出して、顔の前にぶら下げる。

「それ、京香の・・・!?!」

すぐにリエが反応する。

「このピアス、要さんが殺された後に、モミの木の根元に埋まっていたのを見つけたんだ。だからあの足跡は、別に犯人のものってわけじゃなくて、ピアスを埋めた人の足跡が偶然そんなふうに思われちゃっただけじゃないかな」

「そうだったのか・・・」

駿が呟く。

しかし、すぐに疑問の声が上がった。

「でも一体誰が？というかそもそも、現場に落ちてたピアスの片方を、何のために埋めるの？」

コナンは問い掛けてきたリエにニツコリと笑顔を向けた。

「それは律子さんに聞けばわかると思うよ。埋めたの、たぶん律子さんだから」

「ええ!？」

「り、律子さん・・・」

「要さんが殺されてみんなでリビングに集まっていたとき、すごい寒そうに、ずーっと手を擦ってたよね。雪を掘って、冷えちゃったんじゃないの？」

無邪気な声色とは裏腹に、的確なコナンの指摘に、律子はみるみる青ざめていった。

小五郎が無言で彼女に歩み寄り、ぐいっと両手を取って指先を観察する。

「あ、ちょっと・・・！」

「両手の爪の間に土。爪に入り込んだ土つつーのは、洗ってもなかなか綺麗に取れないんですねえ」

「・・・。」

小綺麗にネイルアートを施した指先に、明らかに不釣り合いな茶色い土がびっしりと付着している様を見られ、律子はただ立ち尽くすしかなかった。

「警察でこのピアス調べてもらったら、律子さんの指紋とかも出てくるかもしれないね」

コナンの言葉に、律子は何かを覚悟したように目を閉じて細く息を吐いたかと思うと、やがてがっくりとうなだれた。

「あんたも何か事情を知ってそうですね。まあ、警察が到着したらゆっくり伺いましょう」

小刻みに震えながら下を向いたままの律子に、小五郎は冷たく言い放つ。

そんな律子と結城を交互に見ながら、駿が上ずった声を上げた。

「ひょっとしてお前ら、共犯とか!？」

「ああ、あり得ますなあ」

「ち、違うわよ!」

「でも毛利さん。仮に僕や律子が犯人でも、佑介は殺せないですよ。彼が薪を取りに外へ出て行ってから遺体を発見するまで、僕たちはずっとリビングにいたんですから」

もはや笑みは消えていたが、尚も冷静なまま、結城は言った。

「な、なんですって!？」

「うん。確かに要さん殺害のときアリバイがない結城さん、律子さん、前川さんの3人は、岡林さんが殺されたはずの時間帯は、リビングから一步も外に出てなかったよね」

「た、確かにそうだったな・・・」

駿も状況を思い出し、コナンの言葉に同意する。

「そんな・・・じゃあ、不可能犯罪じゃねえか・・・!」

小五郎が、茫然と力の抜けた声を発した。

再び、結城の顔に笑みが差す。

だが、その勝ち誇ったような表情を一瞬にして凍りつかせたのは、次のコナンの一言だった。

「ねえ。交換殺人って知ってる？」

「・・・！」

表情を失う結城。彼だけでなく、コナン以外の全員が驚愕の表情を露^{あら}わにした。

「交換殺人って・・・まさか」

「僕、推理ドラマで観たことあるよ。2人の人間が、お互いの殺したい相手を交換して殺害する方法。そうすれば殺害する側とされる側に表面上は動機が発生せず、疑われるリスクが軽減される。共謀して、お互いのアリバイ作りや口裏合わせもできるんだって」

結城は、挑戦的に語りかけてくる目の前の小さな少年をじっと見据えたまま、何も言わなかった。

コナンの言葉に、小五郎が何かをひらめいて、ポンっと手を打った。

「わかったぞ！要さんを殺したのは結城さんで、岡林さんを殺したのはまた別の人間ってことだ！そういうや要さんは刺されたあと凶器を引き抜かれてたけど、岡林さんはナイフが刺さったままだったな。別々の人間が殺したと考えれば、その殺害方法の違いも説明がつく！」

「ちょっと待って・・・じゃあまた別に殺人犯がいるってこと!？」

「そういうことだ、蘭。結城さんのアリバイを保障するために、代わりに岡林さんを殺した犯人がいる。しかも、この中にな」

「うそでしょ・・・」

尚も、結城は口を閉ざしたままだ。

さらにコナンは指摘していく。

「それと、この間殺された摂田智也さんも岡林さんと同じく、ナイフが突き刺さったままだったんだよね？」

「そ、そういえば・・・」

「でも殺害方法が同じっていうだけだろ？摂田さんまで岡林さんと同じ犯人に殺されたっていうのは考えすぎじゃねーか？ボウズ」

「おじさん、さっき電話で目暮警部が言ってたよね？摂田さん殺害の凶器の手掛かりのこと」

「ん？・・・ああ、ナイフの金具のところに灰色の繊維が挟まってたのかなんとか・・・」

『灰色の繊維』という単語が出たとき、ある人物が微かにビクツと体を跳ねさせたのを、コナンは見逃さなかった。

同じくその様子を目撃した蘭は、何かに気付いたのか、一瞬ハツとしてから、片手を口元へ持ってきて考え込む表情になった。

「まあたぶん指紋を残さないためにはめてた手袋か何かの繊維が付着したんだろうが、でもそんなことだけじゃ今この時点では何の手掛かりにも・・・」

「岡林さんが殺害された凶器にも、手掛かりが残ってたよね？」

「・・・柄えの部分の、返り血が擦れた痕のことか？」

コナンは小五郎を真実に導くために、遠回しに誘導していく。

「うん。あの状態では犯人の手に血が付いたのはほぼ間違いないけど、今は誰の手にもそんな形跡はない。ていうか、そもそも凶器を素手で触った可能性は考えにくいしね」

「・・・そうか！」

決定的な証拠モノに辿り着き、表情を輝かせる小五郎。

「岡林さんを殺害した犯人が、岡林さんの血痕のついた手袋やハンカチか何かを所持してる可能性が高いってことだ！」

その言葉に、全員が息を呑んだ。

とうとうこの事件の全貌が明らかになる瞬間が、目前まで迫ってるのである。

「一体・・・誰なの・・・？」

律子が、まるでその場の全員に問いかけるように、小さく言った。

「身体検査や部屋の搜索で、すぐにわかることですよ。まあ、岡林さんが殺されたときずっとリビングにいたっていうあなたと結城さん、前川さんの3人は除外しても良いかもしれませんが」

「岡林が殺されたとき、他の奴らはどこにいたんだっけ？」

駿は眉をひそめて、記憶の糸を辿った。

「律子さんに結城さん、前川さん、それから僕はずっとリビングから動いてないよ。で、岡林さんが薪を取りにリビングを出て行ったあと、蘭姉ちゃんと小五郎のおじさんはコーヒーを淹れにキッチンに行ったんだよね」

「ああ、そうだったな」

コナンのフォローで、小五郎もだんだんと記憶が甦ってくる。

「で、リエさんがトイレに行くって言ってリビングを出て行ったんだよな」

「まさかりエ・・・お前・・・」

「あんたなの!？」

駿や律子に問い詰められ、リエは慌てた。

「ちょ、ちょっと待って! 違う! 確かにリビングを出たけど、本当にトイレに行っただけよ!」

「・・・」

「やめてよ！信じて！私、岡林君を殺してなんかない！！」

疑いの目を向けられ、リエが泣きそうになりながら必死に否定する。だが今や、全員の視線はリエに注がれ、その場は水を打ったように静まり返ってしまった。

今にも泣き出しそうなリエの、荒い呼吸だけが聞こえる。

「落ち着いて。思い出してみよ。もう1人いたでしょ？リビングを離れた人が」

そんな中、コナンの単調な声が響いた。

「寒くなってきた、岡林さんが暖炉の火を大きくするために薪を取りに行つて、蘭姉ちゃんとおじさんが、体が温まるからってコーヒ―を淹れに行つて・・・その人はそのとき、寒いから防寒着とか手袋を取りに部屋へ戻るって言ってリビングから出て行ったよね」

状況を思い出した者が、次々と目を見開いていく。

コナンは無邪気に、その人物へと問い掛けた。

「あれれえ？でも何で手袋してないの？」

その人物は、ぎゅっと拳を握りしめる。

「取りに戻ったはずだよな？自分のと、同室の蘭姉ちゃんのコートも持って降りてきたんだもん」

蘭は、先ほどの予感が、やはり当たっていたのだと確信した。

「たまたま持って来るの忘れたの？ ほら、ここに来るときしてた、あのグレーの毛糸の手袋だよ」

「グレー!？」

「灰色・・・」

『灰色の繊維』という手掛かりの意味が、ここでようやく、はつきりとした輪郭を成した。

「ねえ。そういえば、変だと思わない？ 岡林さんって小屋の中で刺されたのに、わざわざ外に出て倒れてたよね。雪が深く積もってる、冷たい地面に。何でかなあ？」

——コナンは尚も追い詰める。

「ひょっとして何かのダイニング・メッセージだったのかな？」

——この悲しい事件を、終わらせるために。

「あ、そういえば“深い雪” って書くんだよね？ 深雪さんの名前って」

そこにあるのは、ひとつの狂気

気付くとわたしは“ なにか ”を持っている

その“ なにか ”を、わたしは振り上げる

この“ なにか ”を持って

あなたを殺しにいきましょう

気付くとわたしは“ なにか ”を宿している

その“ なにか ”に、わたしはとらわれている

その“ なにか ”が、わたしをそうさせる

この“ なにか ”を持って

あなたを殺しにいきましょう

この“ なにか ”は、一体なんだろう

その“ なにか ”が、わたしは怖い

その“ なにか ”が、わたしを“ わたし ”でいられなくする

でもその“ なにか ”は、わたしを酔わせる

わたしは、ここちよくなる

それはきつと“狂気”

狂ってゆくこちよさ

それはきつと“狂喜”

手には凶器を持って

目には狂気を宿して

あなたを殺しにいきましょう

『手には凶器、目には狂気』
次話 page 10・狂気

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9629g/>

手には凶器、目には狂気

2010年10月9日04時33分発行